

---

# 猫さんといっしょ

田中 2 3 号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫さんといっしょ

### 【Nコード】

N0861Z

### 【作者名】

田中23号

### 【あらすじ】

小さな村の青年が、ちょっと大きめの猫っぱいなにかを拾ったことからいろいろなことに巻き込まれつつ、マイペースに歩いていく物語。

## 第一話「猫さんを拾った日」

突然ですが、大ピンチです。

なぜか目の前に見るからに肉食っぽい大きい猫がいます。

ちよつと森に入って薬草を摘んでいただけに・・・

こんな森の入り口にいていいレベルじゃないだろ！！

もつと森の奥に群れで棲んでるような感じでしょ君！！

・・・あ！

群れからはぐれたからこんなところに一匹でいるのか

なつとくとなつとく・・・してる場合じゃないし！！

やばいやばい、まだ人生15年しか生きてないしまだ彼女もいた試しがないし最近やつと薬師の師匠で昔はお城勤めしていたすご腕薬師の婆様に「お前に教える事もなくなってきたねえ、うれしいけどちよつとさびしいねえ」とか言われてほろつときたり幼馴染のかわいいあいつが実は男だったっていうショックから立ち直りきれないし川遊びのときとかぜんぜん来ないで家でお勉強してるもんだから僕が12のころまで女だと思ってたんだよ小さいときにした結婚の約束とかどうするんだよちくしょおおおおおの純情をかせええええ勝手に学術国家の魔法学院なんかに行きやがって「僕のこと忘れないでね」とか涙目で上目遣いで手握られて舞い上が

「つたちよつと後に「ユウリ君はすごいわねえ、学術国家の学校に  
いっちゃんなんて。さすがクエスとサラの息子よね」って村のおば  
ちゃんに言われて「え？息子？」「そうよ？サラに似て綺麗だけ  
ど。小さいころは一緒に川遊びしたことあるでしょ？」「え、あ、うん、  
え・・・？本当に、息子？ってか男？」「なーに。やだ、今まで女  
の子だと思ってたの？確かに綺麗だけど　お・と・こ・の・子・よ  
と笑いながら言われてハートブレイクしたあのときから3年も会っ  
てないのになんかまだもやもやしてるしあれけどそれって俺もしか  
してまだあいつのこと・・・うほっ・・・？あああああああ  
あ違う違うううううやっぱ今の無し俺は正常おれはせいじよ・・・  
ああけどあいつかわいいよな、なんであれで男なんだ・・・あんな  
にかわいいに・・・あれなんでこんなことを考えて・・・

「ハッ！！でか猫！！」

「って、あれ。」

「あの猫威嚇してるけど動いて無いし、弱ってる？」

「怖いけどなんかほっとけないし、少し近寄ってみるか。」

「怖くないよー、怖くないよー」

「言ってると思うけど犯罪チックな台詞だなこれ・・・」

「近寄っても飛び掛ってこないな。」

って、うわ、なんじゃこりゃ、はひどい怪我だな。

うーん、手持ちじゃまともな処置ができません。

応急手当だけして、村の婆様に見せるしかないな。ちなみに、婆様とは僕の師匠で、凄腕の薬師だ。

とりあえずさつき摘んだ薬草と、布と水は確かバツクにあったな。

「猫さんや。応急手当だけしちゃうから、ちょっと染みるけどできれば食べないでほしいな、なんて」

「ぐるるる・・・」

お？猫が威嚇の体制を解いたな。

言葉通じるほど高位の魔物かこの猫さん。

とりあえず大丈夫そうだし傷口を水で洗って薬草をちよつと揉んで布と一緒に巻きつけよう。

これでよしっ！

応急手当もしたし、あとはお持ち帰りするだけか、このくらいのサイズなら何とか抱えられるはず。

「猫さん、猫さん。とりあえず応急手当したけど傷が深いのでできれば村に連れ帰ってちゃんとした処置をしたいんだけども。抱えてよろしいか？」

「ぐる」

つと、一鳴き。

おーけーってことかな。

よし、おつもちつかえつりいいい！

なんとか抱えられるな。

けど残りの薬草は放置だなこりゃ。

村まで急ぎますかつ！

## 第二話「天使様をお願いされた日」

でか猫を抱えて、やっとの思いで村に戻る。

我が村、その名も「サイ村」。

でかい猫を抱えて猛ダツシュしてるのを見て。みんな声をかけてくるが返事をする暇はない。

急いで村の端にある我が家の納屋に藁を敷き詰め、猫さんを横たえて婆様のいる母屋に駆け足する。

この時間なら部屋で薬草を煮ているかな、あたりをつけて僕は母屋の婆様の部屋へ走る。

「婆様！でかい猫が森で怪我していたので連れ帰ってきました！傷が深いので急ぎで診てもらっていいですか！」

扉を開けると、まさに薬草を煮ていた婆様を見つけ早口で要件を伝える。

「分かったわ、納屋かしら？」

婆様は、書き混ぜていた鍋の火を消し、こちらに向きなめる。

「はい、寝かせてあります！」

僕がそう言つと、婆様は手当箱を持って早足で納屋に向かう。

僕はそれに遅れ無いように行つた。

「応急手当がよかったわね、新しい布と四番と十一番をお願い」

猫さんを一通り診た婆様が僕に告げる。

「わかりました！布と四と十一ですね！」

また母屋まで走って診察室の棚から布と四と十一と書かれた引き出しの中の小瓶を持って引き返す。

あとは婆様の独壇場である。

テキパキと治療するので、布を巻きなおすくらいしか仕事がなかった。

「猫さんは何を食うかねえ？肉？とりあえず果物をもっていくか」

治療が終わり、猫さんが食べれそうなものを見繕って納屋に戻るも、猫さんご就寝中だ。

猫さんは、婆様も見た事も聞いた事も無い種族だそうで。



どうしたものかと二人で考えるも、とりあえず元気になるまで面倒を見ようということになった。

「あとは僕が納屋に残って猫さんを見とくので、婆様は母屋で寝てください」

いつの間にか夜も更けてきたので婆様を母屋に返し、僕は毛布に包まって猫さんの様子を観察する。

治療してから全然起きないので、起きたときに何か食べ物を与えないといけないので、僕は眠い目を擦って何とか意識を保とうとする。

しかし、さすがに今日はいろいろあったし、眠……い……。

「人の子よ。我が主の獣を助けてくれたこと、礼を言います」

めのまえに　しろい　なにか　が　あらわれた　！

夢か夢だよな。

なんか神々しいけど。さすが僕の夢だな。うん。

「夢ではないですよ」

「あ、はい」

えつと・・・どちら様でしょうか・・・？と言える雰囲気じゃないな！

「人の子は私達のことを天使と言います」

ああ、心も読めるんですね・・・

「はい」

つて、天使様ですが、僕なんかしましたっけ、いや確かにあんまり信神深くないけども。

ちゃんとエツカ教の巡教シスターさんが来たときとか広場でお説教聴いてお祈り奉げてますよ！

「先ほと言った通りです。我が主の獣を助けたでしょう。その礼を言いに来ました」

・・・あ！

もしかして猫さんのことですか！

「はい。あれは我が主が作りだした獣の末裔です」

へえ

つて天使様の主は神様の理論からいくと、猫さんってもしかして神獣・・・！？

「そうなります」

超VIPじゃないですか猫さん・・・

そしてレアだ・・・

なんでそんなすごい獣がこんな田舎の森にいるんだ！

しかも怪我してるし！

「元はアルバ大陸の霊峰サドンにいたのですが。生まれた直後に魔物が攫ったのです。怪我はそのときのものですね。すぐに親の神獣が追ったのですが、追い詰められた魔物が苦し紛れに転送魔法でとばしたのです。」

なるほど。しかし神様が天使様がぱつと助ければ良かったんじゃない？

「天界に住まうものは、己の意思で世界に力を行使することは、ほぼできません。世界に請われた時のみ行使できます」

なるへそ。大変ですね。

「なので人の子よ。我が主の獣をサドンまで送り届けてはくれませんか。親の神獣も己の領域を長く空けることはできません」

アルバ大陸ですか。送ってあげたいのはやまやまですが、ちょっと遠い上に僕は低位の魔物にもおくれをとりますよたぶん、そんなのが高位の魔物なんてとてもとても。

「もちろん、それなりのチカラを貸し与えます」

あれ、でも干渉はできないんじゃない？

「力の直接の行使はできませんが、我が主と私の祝福が与えられます」

神様と天使様の祝福・・・？ぐ、具体的にはどのような？

「我が主は癒しを、私は守護を司っていますので、人の子が祝福を受ければそのチカラを得ることが出来ます」

おお、癒しに守護かー。それならなんとか・・・なるのか？

「神獣はまだ幼いですが別の神の祝福を受けております。癒しと守護の祝福があれば魔物程度退けられるでしょう。送り届ける期限については、人の子、そなたが生きている間であればいいです」

むむ、気の長い話ですね。分かりました。それではこの件お引き受けいたします。

「おお、礼を言います、人の子よ。祝福はそなたが起きたときにはすでに成されているでしょう。それでは、頼みましたよ」

あいさー、がんばりますよ！

### 第三話「猫さんの傷と婆様の腰が治った日」

・・・

生暖かくざらざらして湿ったものが僕の顔に当たる。  
まだ眠いのになんだこれは。

「にゃー」

にゃー？

寝ぼけ眼を開けると、猫さんが僕の顔を舐めていた。  
お腹でも空いてるのかな？

とりあえず押しのけて、僕は用意していた果物を猫さんに差し出す。

「はいはい、取ったりしないからゆっくり食べてね」

それにしても、猫っぽいとは思ってたが、本当に「にゃー」と鳴く  
とは思っていなかった。

食べ物に夢中な猫さんを他所に、怪我の具合を観察する。

さすがに急に治るわけもなく、しっかり怪我は残っているのを確認  
する。

そこで、何故か内容をはつきり覚えている夢のことを思いだす。

あの夢の癒しのチカラがあれば、猫さんもすぐ治療できそうだと

思う。

しかしそんな夢が現実なわけがないとも思う。

・・・

結局、何故かはっきり覚えてる夢の力を試してみることにした。  
なんで試してみようと思ったのか自分でも良く分からない、ただ妙  
なりアリテイが夢にあったからかもしれない。

しかし、祝福を与えたと言われたけど、どう使うのかが分からない。  
とりあえず、教会の人がやるようなポーズで祈ってみることにする。

（猫さんの怪我がなおりますように！！ついでに婆様の腰痛も治り  
ますように！！）

これで治ったら僕は神様信じようと思う。

とりあえず1分ほど祈って、猫さんの様子を見る。

「ちょっと包帯取りますよーっ」と

なるべく刺激を与えないように、猫さんの包帯をはがしてく。

「じゃあ」

おとなしくされるがままの猫さんを撫でつつ包帯を剥がし終わるとそこには傷が塞がった猫さんの体があった。

ものすごい驚いて、僕は猫さんの体を弄る。

しかし、確かめてみても猫さんの他のどこにも傷はなく、ただとても手触りのいい毛の感覚だけが手に残った。

「すごっ、神様すごっ！天使様もすごっ！夢だけど夢じゃなかったのかあれ！」

僕は、神様の奇跡を目の当たりにして興奮して叫んだ。

「あれ、ということは、僕はお隣の大陸までお使いに行かないといけないってことなのか・・・？」

そして、冷静になって、昨日の夢が夢でなかったのなら、僕がやらなくてはいけないことに気づく。

「にゃあ〜」

「ああ、うん、猫さんもお家に帰りたいもんね。」

「にゃん！」

おお、言ってることは完璧に理解してるみたいだなあ、さすが神獣。



これは腹を決めて、行くしかないか。

「となれば、婆様に報告しないとか。あと腰痛治ったか聞かないとな」

「うにゃーん」

「こ、こら、猫さん！さすがにその巨体でのしかかられるとやばい！」

「にゃあ〜」

「甘えた声だしてもだめです！とりあえず母屋に行ってくるから、おとなしくしてるんだよ！」

「にゃう」

と言っわけで母屋へ移動。

納屋に行こうとしてたら、婆様とちょうど廊下でかちあったので話があると呼び止めて一緒に居間に行く。

僕は、簡単に夢の天使様の話と実際猫さんの傷が治った話を婆様にする。

「ちょっと猫さんの様子、見てくるわ」

僕の話聞き終えた婆様は、信じられないという顔をして足早に納屋へ向かった。

きつと僕でも自分の目で見ないとこんなこと信じないだろうと思う。

とりあえず朝食の準備をしつつ待っていると、婆様はすぐに戻ってきた、

僕はパンとサラダを持って居間に戻る。

「本当に治ってたわ」

「婆様に言われてやっと確信が持てた気がします」

僕が寝ぼけていたわけではないことが証明され安心する。

安心すると途端にお腹もへってきたので、とりあえず朝食を頂くことにする。

「ちょっと話も長くなりそうですし、ご飯を先にいただきますしう」

そう婆様に言うと、さっき火にかけた昨日の残りのスープを配膳する。

さすが婆様特製スープ、とてもいい匂いがする。

この味は、なかなか習得できないんだよなあ。

「日々の神の慈悲と恵みに感謝します」

「同じく、感謝します」

婆様の口上にすばやく賛同して、いただきます。

お腹がすいてたこともあり、すぐに目の前の食事が無くなった。

しかし、神様からこの僕が祝福を受けるなんて思いもしなかった。

これは、日々の感謝が欠かせないな。

あれけどお願い事されてるし、感謝されるのは僕なのか。

なんて熱心なエツカ教徒の前で言ったら「神が試練を与えてくださったのです。感謝するのが当たり前でしょう」って言われるな。

僕も婆様もあんまり熱心な教徒じゃないのでそこらへんの感覚がよく分からない。

けど、神様と天使様の祝福を頂いたわけだしな、信仰心は心の片隅にでも持つておこう。

祝福といえば、今朝の祈りを思いだして僕は婆様に質問する。

「婆様、腰の具合はいかかでしょうか」

「そいえば、今日はすこぶる調子がいいわね、あなたが癒してくれたのかしら？」

「ええ、朝に猫さんの傷と一緒に治るように祈ってみたんですが。」

まさか本当に治るとは思わなかった。

これは片隅じゃダメかなあ。

#### 第四話「行ってきますと言った日」

さて、腹ごしらえと確認も終わったことだし婆様と大事な話をするか。

「婆様、僕はどうやら本当にお隣の大陸までお使いに行く事になったようです」

「そのようなねえ。薬師としては一人前と呼べる知識は持たせたわ。けど、長旅となると、また別にいろいろと必要な技術があるものよ。なにより魔物に対処しないといけないし」

「魔物に関しては、猫さんが強いらしいので。後は僕も怪我はすぐに治せますし、守護の祝福というのも頂いてますので、そこまで心配いらないと思います」

「分かったわ。あなたの事だから無茶なことはいらないと思うし、老い先短い婆を悲しませることもしないでしょう？ 神様もついていることですしね」

「そうですね。老い先短いという部分以外は否定しません。神様もついていますし」

二人揃って少し笑う。

「村のこと心配しなくていいわ。腰痛を治してもらいましたから、薬草取りもいけるわ。」

「けど無理はしないでくださいね。」

「まだまだ現役よ？」

「老い先短いつて言ってませんでしたっけ？」

「生涯現役ですから」

「かないませんね」

「うふふ」

本当に、この婆様に敵わないと思う。

家のほうは頼もしい婆様がいるし大丈夫そうだから、僕は長旅の準備をしようと思案を巡らせる。

「長旅の知識やは、ユウリのお父さんのクエスに聞くといいわ。  
あの人は昔、冒険者として有名だったから」

「あ、うん、はい、分かりました」

ユウリというのは僕の幼馴染だ。

とてもかわいらしい外見の幼馴染だ！！

だが男だ！！

男なんだよおおおお！！

微妙な受け答えになったのはそこらへんが起因してるんだ。

初恋は実らないものだ。

ちなみにユウリは今、学術国家の学校にいたため、3年ほど村を留守にしている。

そのお父さんのクエスさんは、とても気さくでいい人だ。

昔はぶいぶいいわせていたらしいけど、奥さんのサラさんと駆け落ち同然でこの村に来てからは、剣を鍬に持ち替えて、頼れる人として村の相談役にもなっている。

そして奥さんには尻に敷かれてる。

奥さんのサラさんは、貴族のお嬢様だった、なんて話もあるくらい、上品で柔和な人だ。

怒るととても怖いけど。

めったに怒ったところを見た事はないが、クエスさんがお酒飲みすぎでぶっ倒れたときは、やばかった。

いつもの笑顔なんだが、目が笑ってない上に、ただ淡々とクエスさんを数時間に渡りお説教していた。

僕ならあのプレッシャーに30分持たない自信がある。

サラさんの話はおいておいて、こういった話ではクエスさんが一番頼れる人に違いないので、教えを請いに行く事にしよう。

クエスさんの家に行き、ノックもせずに突撃。

「クエスさん、サラさん、こんにちは。」

「おう、キヤス坊。どうした？」

「いらっしやい、キヤスくん」

こんな小さい村にプライバシーなんてものもあり無く、大抵用事のある人の家には突撃して、いなければ探すか、そのまま待つかだ。村全体が大きい家族って感じだ。

ちなみに「キヤス」というのは僕の名前だ。

すっかり自己紹介も遅れたが、ひとつよろしくたのむよ！

「見聞を広げるために、少し遠くまで旅に出ようと思ってるんです。」



そこでクエスさんに相談にきました。何分村からあまり出たこともないので」

サラさんがすすめてくれた椅子に腰掛けつつ答える。

ちなみに、この見聞を広げるため、というのは、婆様と考えた旅の口実だ。

さすがに、神様のお使いとか神獣とか言っても、トラブルの素にかなりそうにないしね。

教会の人に聞かれて、下手に騒がれたら面倒だということ考えた。

「ふむ、どのくらいの旅を予定してるんだ？」

「隣のアルバ大陸まで足を伸ばそうかと思っています」

「アルバまでって、そりゃあまた随分と長旅になりそうだなおい」

「あっちのほうまで行かないと、採れない薬草なんかもありますからね」

「しかし、あっちはいまだに戦争やってるらしいぞ」

戦争か。危ないところはなるべく避けて通りたいというのが本音だ。

「キャス坊も、男の子だしな！いいぜ、長旅にいるもんとか、覚えておくといいこととか、まとめて教えてやる！」

「さすが村一番のいい男！」

クエスさんはおだてておけばとりあえず間違いはない。

それから数日、クエスさんの家に通いながら旅に必要なものを揃え、知識を見につけ、猫さんの世話をした。

猫さんもすっかり歩けるようになり、僕の後ろをくつついてくるものだから、村ではちょっとした人気者になっていた。

最初こそ、大きい猫っぽいなにかなんて、魔物かと疑う人もいたが、「にゃーにゃー」鳴きながら人の後ろを歩く姿は愛らしく、子供を中心に触らせてほしいと散々言われた。

そんな感じで、出発の日まで猫さんに後ろから追われつつ過ごした。

そして出発の前日、ささやかながら村のみんなが宴をひらいてくれ、飲んだり食ったりと大いに騒いだ。

その翌日、出発の日には村人総出で、お見送りをしてもらった。

「あまり急がないように。自分の歩幅で歩いて行けばいいのよ。あなたに神のご加護がありますように、ってね。うふふ」

「男の子だからな、冒険したい年頃つてのもあると思うが、無理はするなよ！」

「ユウリのところに行ったら、顔見せてあげて頂戴ね。あの子喜ぶわ」

「水には気をつけるんだぞ!」

「何かあったら無理せず戻って来るんだよ!」

「猫さんばいばい」

やさしい言葉をかけられると嬉しいやら恥ずかしいやら。

まあ、とりあえず!

「いってきます!」

「にゃーん!」

## 第五話「纏めてみた日」

さて、街道を歩くこと数時間。

休憩がてらこの数日で学んだ事を少し整理してみよう。

まずは地理から。

といっても、僕自身そこまで詳しくは知らないので大雑把なものだけ。

まず、現在地はオーステス大陸の南に位置するイルア王国、そのまた南に位置するサイ村を北上する街道だ。

この街道をまっすぐ行くと、イルア王国南方最大の町ハロースに着く。

さらに北上すると王都シザルス、その北が北方最大の町ヒルースだ。

イルア王国の北はウルテマ学術国だ。

その名の通り、ありとあらゆる学問が集まっている。

幼馴染のユウリもここにいる。

ウルテマの北はエツカ教の広大な教皇領となっていて、巡礼地として有名だ。

ちなみにエツカ教は、数多くの神々を信仰する、多神教だそうだ。

まじめに説教を聞いてなかったので詳しくないし、あまり興味もない。

ちなみに他の宗教というのは聞いた事が無い。

さて、教皇領のさらに北へ行くと、カリウス帝国とセラリア同盟国がある。

この2国は長い間戦争中である。

もつとも、最近の大きい戦は3年前で、双方疲弊しきって事実上の休戦状態らしい。

カリウス帝国から東の海上を抜ければ目的地アルバ大陸である。

アルバ大陸のほうも、戦争をやっているらしいのだが、詳しい情報が入ってくるはずもないので、道すがら集めることになる。

とまあ、これが大雑把な地理の話で、目的地までのルートは簡単。

ひたすら北上してカリウス帝国でアルバ大陸行きの船に乗るだけだ。時間は掛かるだろうが、ルートはほぼ一直線なので迷うことはないだろう。

アルバ大陸に入ったら、目に付く中で一番でかい山が霊峰サドンらしい。

それぐらい大きい山だそうだから、現地で聞き込みすれば大丈夫だろう。

行商人のおっちゃんの話や婆様の持ってた昔の古い地図を頼りにしているの、どこまで正確かわからないけど！

次に、種族については、婆様が昔王都のお城勤めだったこともあり詳しい話がきけた。

イルア王国は種族に頓着しない気風なので、王都あたりには他種族も訪れるようだ。

僕が人族以外で見た事があるのは、亜人族だが、彼らは多種多様な種族だ。

耳、尻尾、足、手、顔、体の中心から遠い箇所ほど動物の特徴がでるらしく、それにも個体差があり、尻尾と耳を隠せば人族にしか見えない者もいれば、顔全体が獣という者もいる。

セラリア同盟国は亜人の作った国で大半の国民が亜人だ。なので戦争してるカリウス帝国には亜人がほとんどいない。

あとは魔族もいるが、僕は見た事が無いうえに、人族とあまり変わらないため、見分けるのが難しい。

魔力が高く、体に魔力による線が紋様のように浮かび上がることがあるのでそれで見分ける。

魔力が出たついでに魔法の話をしたいのだが、サラさんいわく僕は魔力を認識することが上手じゃないらしく、魔法を使うことはできないそうだ。

昔に、幼馴染のかわいいあいつが魔法の勉強をしだしたときに、自分も習おうとしたときに聞いた。そして泣いた。

そしてあきらめきれずに、ちよくちよく幼馴染の家に顔だして一緒に勉強したときの知識を引っ張りだすと！

生物は多かれ少なかれ魔力を持っていること。また世界にも魔力が漂っていること。

魔力を認識し、自分の意思で扱うことができる者を魔法使いと呼んでいること。

自分の魔力を消費しても、少しずつ世界から自分の体に取り入れて回復すること。

火、水、土、風の属性があってそれぞれ火と水、土と風が対になっていること。

魔力は一定の言葉や文字列、形、鉱石などに宿ること。

その特製を生かして、魔法具と呼ばれる魔力を供給するだけである一定の効果を得るものを作り出していること。

魔力は人によって一部に違いがあり、それによって個人を特定することに使われていること。

いまだに盛んに研究されていたり、古代の遺跡から今の時代では再現できない魔法具まで発見されるらしく、謎の多い分野であること。

こんな感じだったはず！

自分で自分の傷に塩を塗ってる気分だ！

結局、魔法は使えず、面白くなくなってだんだん幼馴染の家になくなって・・・

今夜は猫さんに慰めてもらおう・・・抱き枕的な意味で。

気を取り直して、魔法とは違うけど教会の信者の中でも信仰心の高い者や神に氣に入られている者は、祈りを奉げることによって、奇跡を起こすことができる。

しかし、長時間祈らないといけないこと、それでも思った通りの効果がでるか分からないことなど不安定な要素もある。

それを差し引いても、絶大な効果を引き起こすから、教会は大陸中に信者がいるのだらうけど。

ちなみに僕の祝福もこの奇跡の類なだらうけど、たぶん教会のよりお手軽に起こすことができるんだらう。

言語と文字については世界でほとんど共通のものが使われているといわれている。



亜人族のなかには、部族独特の言語や文字を使う者たちもいるが極少数だ。

クエスさんが世界中心赴くままに周ってたときに、大体話も通じだし、文字も読めたって言ってたし。

話を通じなかった亜人族の方たちとも、拳で大体通じたって言ってたし。

次いで、ギルドについてはクエスさんがいまだに一応所属してることになってるらしいので、いろいろ聞かせてもらった。

ギルドは大陸全土に渡り点在し、アルバ大陸にもある。

ギルド所属員への、依頼の管理、身分の保証などをやっている。

依頼については、階級制度があつて、自分の階級にあつた依頼しか受けられないことになっている。

身分保証については、ギルドに登録するときに、教会に並ぶ情報網を持つギルドが、各地のギルドの情報を繋ぐ魔法具によって、過去から現在までの犯罪歴等無いか厳しくチェックし、ギルド登録後も逐一情報は更新されるので、信頼度は高いらしい。

あとギルドの大きな仕事といえば、各国の貨幣の両替がある。

オーステス大陸の各国は、銅貨１００枚で銀貨１枚、銀貨１００枚で金貨１枚、ということになっているが、国によって貨幣の形や重さ、純度に至るまで違いがあるため、ギルドが両替所としての役目

も果たしている。

貨幣の目安としては、町の安宿にとまるのに、銅貨20枚、一食たべるのに銅貨5枚といったところ。

ちなみに、クエスさん、階級が高いらしく、紹介状を書いてもらった。B以上の人なら保証人になれるので、面倒くさいチェックが省略されるらしい。ありがたやありがたや。

最後に、魔物についてかな。これもやっぱりクエスさんが詳しくかった。

けど、ドラゴンまで見てきたように語らないでください、勘弁してください。弱点とかいいです、そんなやばそうところ切りつけるくらいなら、見たら即逃げるんで。

と、いろいろ脱線しつつ聞いた話を纏めると。

魔物は世界各地にいて、ゴブリンみたいな低級のものからドラゴンのような高位のものまで多種多様にいる。

高位のものほど知能が高いらしい。

魔物を倒すと、魔力石という石が浮かび上がる。

これは、魔道具の動力として使われるのでギルドが高値で買い取ってくれる。

もちろん、高位のものであればあるほど値は上がる。

魔物によって武器や防具に加工できる部位があったり、肉が食用として高値で取引されたりする。

ちなみにドラゴンの肉は、腐らず、年月が経つにつれおいしくなっていくらしいのだが、大抵の人は我慢できずに食べてしまいうらしい。それくらいうまい。うまかった。クエス家の床下は食材の宝石箱やで！比喻表現ではなく。ざつくざくだ。

あとは魔物によっては弱点、逆に効かないものがあつたりするので、クエスさん聞いたのだが。

あの人、なんで人が超えちゃいけないような魔物の弱点しか知らないんでしょうか。

もう少し低いレベルの魔物の弱点が聞いてみると、殴ったら消えたぞ、って・・・

もはや武器すら使ってないし！

ここら辺にでる魔物の特徴を村の自警団の人教えてくれて助かった。

とりあえず、こんなところか。

当面の目標は、猫さんと僕のチカラの確認と、ハロースでギルド登録してお金稼いで旅費をつくらないといけない。

「がんばろうな、猫さん！」

「にゃー！」

「けど、ドラゴンとか見かけたらすぐ逃げるんだよ！お肉はおいしかったけど、飛び掛っちゃいけませんからね！」

「にゃあ・・・」

「残念そうにしないの！猫さんの親猫さんなら食べさせてくれるだろうからさ。たぶん、きっと」

「にゃんっ」

「他にもおいしいものいっぱいあるだろうからさ。のんびりいきましょー！」

「にゃーー！」

## 第六話「町に着いた日」

翌朝。

猫さんが寝ぼけて噛み付いてきたこと以外、特に問題も無く起床。

ちよつと血が出たもののすぐ傷口が塞がったので、癒しの祝福も自分だけは常時発動してるようだ。

すまなそうにしてる猫さんに、傷がないことを見せて安心させて、手早く準備を整えて出発。

段々と、魔物の出没頻度が高い地帯になって来るらしいので、少し緊張しつつ歩く。

しかし、武器は腰の鉈くらいしかない。

薬草取りに行くときも、鉈一本で魔物を倒していたので、なんとかなると思うけど。

守護の祝福がどんなものか確かめないといけない。

猫さんの戦力も確かめないといけない。

猫さんには朝、どんなことができるのかだけ聞いてみたけど、さすがに細かいことは分からない。

一応、「がおー」ってな感じでお口開けてアピールしてたから、口から何かすごいものをだしてくれると思うんだけど、自信がない。

不用意に、何か攻撃してもらうのみな。

腐っても鯛、小さく？ても神獣だし、底が見えない穴とか地面にあげちゃったらいやだしね！

段々と木々が生い茂ってきたきた道の先に、この旅初遭遇の魔物がいた。

「ゴブリンが3体か」

ゴブリンとは、森に棲み棍棒などを振り回し動物を捕食する、1mちょっとくらいの子鬼だ。

集団で狩をし、ときには人間も襲う。

今回はウサギ狩りだったようだ。

両手にウサギと棍棒を持ち、こちらを威嚇して来ている。

「猫さん、がおーってやつ、いける？」

「にゃんっ」

何ができるか分からないため、微妙な聞き方になってしまったが、猫さんは了承の一鳴きをすると、お口を開く。

瞬間・・・

何かが高速で地面をえぐっていき、3匹のゴブリンのうち一匹に着弾、爆発、余波で他2匹も文字通り消える。

「猫・・・さん・・・？」

「にゃ？にゃくん」

なにその「どうしたの？ほら3匹吹っ飛ばしたでしょ、ストライクだよ！ほめてほめて」みたいな顔は！

「猫さん！今の禁止、ダメ！絶対！あんな火力いらなくてしょ！？木もあんなになぎ倒して！」

「にゃう・・・」

しょんぼりする猫さんを見てちょっと罪悪感。

「ね、猫さん、ゴブリン倒したのはえらいよ！すごいよ！ただ少し周りの被害を考えてというか、火力を抑え目にしないと、ね？わかるよね？」

「にゃん」

「おお、さすが猫さんだ！えらいぞ！」

と言って、全力で撫で回すと、すっかり猫さんも機嫌が元通り。

ああ、猫さんかわいいな！もう！

その後、何度か遭遇したゴブリンや、コボルトを猫さんの魔法？ブレス？で倒し、加減をマスターしたみたいだ。ついでに魔石も貯まってきた。

ちなみにコボルトとは、二足歩行の犬型魔物で、サイ村周辺ではほとんど見なかったが、器用に弓を使うものもいる。

「よし次は、僕が前に出るから、猫さんは合図があるまで待機で。おーけー？」

「にゃん！」



「いい返事だ、守護の祝福がどんなにか試すから少し間置いて待っててね！」

守護ってことは、たぶん攻撃が効かない、もしくは効きにくい、とかそんな感じだと思っただけど、攻撃当たることに神様に祈るのか？

さすがにそんな不便じゃないよな。

一応神様に「なんで説明がないんだっ！」と祈ってから魔物の前に出る。

コボルトが2匹なので、普通に倒せそうだが、どうするか。

ーカッン・・・ー

と、油断したところに後ろから矢が来たが、何か硬いものに当たったかのような音を響かせ落ちる。

これは、予測どおりの効果かな・・・？

考えつつ、目の前のコボルトを無視して背後の木の陰にいる弓持ちコボルトに接近、いっきに鉈で倒そうとするも、もう一匹草葉に隠れていたコボルトが弓を猫さんに向けていて・・・射った・・・！

「猫さんよけて！」

叫んだが遅い、猫さん目掛けて矢が・・・矢が・・・？

あれ、なんでこっち来てるのあの矢！

どうみてもいろんなものを無視してこっちきてるよ！？

なにそれ、どんな高等技術！

うお、あたる・・・！

――カッン・・・――

ああ、守護の祝福があるか。

よつと！

呆然としていたコボルトの群れを簡単に倒して、猫さんの元へ。

その後、何戦かして、なんとなく守護の内容が分かってきた。

硬くなる自体は祈らなくても常時祝福が効いてるみたいだ。

さらに、祈ることによってある一定の距離にいる敵を強制的に全部自分に向かってこさせることができるようだ。

そして味方に向かうはずだった攻撃も、強制的に自分に向くようになっている。

なんとという肉壁仕様・・・

あと、硬いことは硬いんですが、限度があるらしく、それを超えると超えた分だけ僕にダメージがくる。

まだこのレベルなら超えた分もちよっとちくつとするかなあ？程度で大丈夫ですが高位の魔物とかやばいかも。

「あんまり強い攻撃に当たると、自分が怪我して、すぐ治る。そしてまた攻撃されて・・・」

身につけている物にも守護がかっているで、服には特に傷みも無く、限度を超すと僕の肉体にダメージがくる。

これは防具を買っても意味がない気がしてきた・・・

鍛えれば限度あがるのかなあ。しかし、この場合鍛えるのは肉体じゃなくて信仰心なのか・・・！？

それから、猫さんと前衛後衛に別れてコンビプレイ！

少し、いや、かなり、誤射が心配だったけど、猫さん、かなりの腕前？のようで僕が引き付けた魔物をスナイプしていく。

猫さんの咆哮？手加減してるから吐息？は手加減と狙いを定めるのにまだ少し時間かかるから、町でちゃんとした武器を買って自分の攻撃力もあげるかぁ。

僕壁猫さん無双で、結局ハロースには2日目の昼過ぎにはついてしまった。

「しかし、猫さん連れてはいれるのかな？」

「にゃーん？」

「いやほら、すれ違う行商の人とかも、ぎよつとして猫さん見るじゃない。門番の人にも魔物と間違われてはいれないんじゃない」と

「にやつ、にやつ、にゃーう・・・」

「おおお、お、落ち込む猫さん！なんか言われたらペットってことにしてごり押しすればきつと大丈夫だ！！村長さんも紹介状書いてくれたし！」

「にゃーん、にゃーん」

神獣をペットと言ったらあとが怖いけど、仕方ない。

「よし、それじゃあ、気を取り直して、いきましょー！」

「にゃーんー！」

## 第七話「町に入った日」

唐突だが、なぜ僕がいまだに猫っぽい何かであるところの神獣を、名前もつけずに猫さんと呼んでるかというところ。

ただ単純に、神獣に名前つけるなんて怖くてできなかっただけのことである。

そんなわけで、猫さんにおちついてる。

そしてなぜ、唐突にこんな話をしたかというと。

ハロースを囲む壁が見えてきて、いざ入門、と思ったら手前で止められた。

「止まれ！！」

びつくりして、挙動不審になってしまう。

「止まれと言っているだろう！止まらんと力ずくで止めるぞ！こちらには魔法士もいる！」

やばいと思って両手を上げてすぐに止まる。

「ぐるるるっ」

と、僕の隣から唸り声が聞こえてくる。

「ね、猫さんストップ、ストップ！大丈夫だから、おとなしくして  
！！」

慌てて僕は猫さんを制止する。

「ぐるる・・・」

なんとか猫さんにも止まってもらい、門番？さんに尋ねる。

「えーっと、この通り、止まったんですが、どうすればいいでしょうか？」

「え、あ、ああ。俺のあとについて来てきれ。くれぐれも変なまねはするなよ。こちらには魔法士がいるからな。そちらの魔物にも言い聞かせてくれよ」

「わ、わかりました。猫さん、あの人たちはがおーってしちゃだめだからね！大人しくついてきてね！」

「にゃん」

「（（（がおーってなんだよー！！）））」

「えーっと、それじゃあ、キャス君は、サイ村から来たんだね？」

「はい。見聞を広めるために世界を周ってみたいと思いますて」

「ふむ。村の身分証、クエスさんのギルドへの紹介状、サイ村の村長の紹介状もある。」

身分証とは、年に一度、その地域の役人が特殊な魔道具を持って、村を周ってその年生まれた子供全員の名前と魔力を記録したときに発行されるもので、魔力により個人を識別できるようになっている。

「町に入るのも大変だろうということで、村長が持たせてくれました」

「まあ、確かになあ」

苦笑いしつつ、猫さんをみる門番さん。

ちなみに最初に静止の声を掛けたのもこの人で、他の兵士さんにテキパキ命令してたところを見ると偉い人だろう。

みたところ、30台半ばで、ちょっと生えた無精ひげが似合ってるダンディな人で、雰囲気からしてとても強そうである。



「あー、紹介状には、その魔物はキヤス君が飼い主で、キヤス君の言うことをしっかり聞く。と書いてあるが、違うないかい？」

「はい！猫さんは僕の言うことをしっかり聞いてくれますし、無闇に何かに襲い掛かるということもしません」

「にゃんっ」

当然だ、と言わんばかりに一鳴きする猫さん。かわいいよ猫さん。

「本来なら、身分証があれば簡単な荷物チェックだけでいいんだが・・・」

「やっぱり猫さん連れて町を歩くのはまずいですか？」

「うーむ。冒険者にも魔物を飼いならしてる者もいるが、ギルドでちゃんと認定を受けているからなあ」

どうしたものか。

先に僕だけ行って、ギルドに入ってから猫さんを迎えにいけば・・・  
けど、猫さんがまた攫われたり、魔物と間違われて狩られたらやばいし。

「にゃーう・・・」

「猫さん・・・！」

そんなつぶらな瞳で切なそうに見つめないでくれ！！

僕が君を見捨てるわけないだろう！！

「ふう、仕方ない。俺がギルドまで一緒に行こう」

「い、いいんですか！？」

「ああ。その猫？が人を襲うようにも見えんしな。町に入れても問題ないだろう」

さすが猫さんだ！その愛くるしさは人類共通の認識だね！

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺はハロース警備隊のグリスだ。ギルドまでだがよろしく頼む」

「こちらこそ、お世話になります。改めて自己紹介を。キャスと申します、サイ村から来ました。こっちの大きい猫は猫さんです」

「にゃーお」

「うむ。礼儀正しいな。っと、そっちの猫？は猫さんが名前なのか？」

「あー・・・はい。そうです」

「そ、そうか」

で、冒頭の話に戻る。

なんかグリスさんに微妙な顔されたな。

しかし、仕方ない。

もし親猫さんが名前つけてたのに、猫さんに僕が勝手に名前つけたら、なんかおいしく頂かれてしまう気がする。

「あー、荷物は返すから、中身が無くなっていないか、確認しといてくれ。たまに手癖のわるいやつもいるからな、嘆かわしいことにその間に俺は報告だけしてくる」

「分かりました」

グリスさんが申し訳なさそうに言うてくる、本当にいい人だ。

「大丈夫です、全部ありました」

報告から帰ってきたグリスさんにそう告げる。

「そうか、よかった。それでは、ギルドに行くでしょう。町の中央部にあるから、歩いて30分程で着く」

「分かりました。よろしくお願いします」

「にゃーん」

そして、ハロースでの第一歩を踏み出した。

ちなみにハロースには、婆様曰く10年以上前に通ったことがあるらしいが、さすがに覚えていないので、感覚的には初めての町だ。

ギルドへの道中、村とは全然違う町の様子に見入ってしまう。

石畳の道も新鮮だし、露店なども多く見た事も無い物があり興味が注がれる。

そこらじゅうで大きな声上がり、活気がある。

建物も、同じような形のものが並んでいたり、石作りのものもあったり。

人も多く、獣人も普通にいる。

きよろきよろしている僕を見かねてか、グリスさんが解説をしてくれた。

「ハロースは、イルア王国南部最大の町と言われている。

イルア王国はとても豊かな土地を有しているが、その中でも南部は、豊穡の神の祝福を受けていると言われるほどだ。

その南部と王都を結ぶ町として、収穫物が一度ここに集まるので、商人の出入りも多く活気がある。治めておられるのは、ハロース公爵だ。

町の中心部には、教会、庁舎、警備隊詰所、ギルド支部、学校がある。

町の南側、こちらのほうには、商工区になっている。宿屋もこちら側にあるから、ギルドにいつてお勧めを聞いて見るといい。俺では魔物同伴が大丈夫な宿はちょっとわからんのでな。

色町もあるが、間違っではいるなよ。お前じゃ真っ裸にされちまいそうだ。

北は住宅区だ。

どこもそうだが、中央は高級と名のつくものが多い、

逆に外壁に近づくにつれ治安も悪くなるので、気をつけるようにしろ。

まあこんなところだな。」

「なるほど、丁寧に説明してもらって、ありがとうございます」

「なーに。俺はこの生まれだからな。お前みたいないまどき珍しい礼儀正しいやつに、この町を少しでも好きになってもらいたいかな」

らな」

「来たばかりですけど、とっても新鮮で、わくわくします!」

「そうだろう、そうだろう! なんせそろそろ秋の収穫祭も近いからな。それ目当ての商人や冒険者ももうじきすると集まってくる。更に活気がでるぞ。俺の仕事も増えるがな!」

「収穫祭ですか! 村でもちよつと前にあつたけど、ぜんぜん規模が違いそうだ」

「なんせ南方最大の祭りだからな。メインストリートを埋め尽くさんばかりの露店と、中央広場で見世物が毎年あるぞ。あと半月ばかりだから、余裕があつたら見て行ってくれ」

「はい、そうしますね! 猫さんもうまいもの好きですから」

「はっはっは。グルメなのかお前!」

「にゃーんっ」

「よし、収穫祭までに稼いで、猫さんと腹いっぱい食べ歩くぞー」

「にゃおーん!」

「元気もあつてよし! そのためにもとつとギルドで登録しないとな!」

「はい!」

南方最大の収穫祭を、猫さんと楽しむためにも頑張ろうと僕は決意して拳を固めた。

## 第八話「いろいろ登録した日」

そして無事、冒険者ギルドハロース支部に到着。

石作りの立派な建物に冒険者ギルドの羽のマーク。

町中でも猫さんへの注目度が高く、みんな遠巻きに見てくるのでちよつと疲れ気味の猫さん。そんな猫さんも可愛いよ！

「ここがハロースのギルド支部だ。しかし本当に猫さんは大人しいな。途中で急に子供に触られても堂々としてるし。こっちが冷や汗かいたぜ」

「にゃにゃん！」

町のことを聞きつつ歩いてるときに、後ろで「大きい猫さんだー！」という声と共に、女の子が猛ダッシュして猫さんに抱き着いて来たときは僕もびっくりした。

たぶん、周りの人もかなりびっくりしてたと思う。

そして動じない猫さん。

そういえば、村で散々背中に乗られたりしてたから、慣れてしまっているのかもしれない。

すぐにお母さんらしき人が走って来て、子供引き剥がして、謝って



帰って行っただが、女の子は名残惜しそうだっただな。

さすが猫さん。その抱き心地で都会の女もいちころだぜ！

「とりあえず、入るか！」

グリスさんの号令のもと、いざギルドへ！

ギルドを入ると目に入るのがひとつひとつ広く仕切られて並んでいるカウンター。ちらほら冒険者の人が座ってギルド職員さんと話をしたり、カウンターに魔石だしたりしている。

カウンターの前のスペースは広く取られており、テーブルと腰掛がある。何人かの冒険者がくつろいで談笑している。

扉側の壁にはところ狭しと紙が貼ってあり、あれがたぶん依頼書だろう。冒険者が目を皿にして見ている。

扉右はすぐ壁になっているが、左のほうは、カウンタースペースと軽く仕切られてテーブルが並んでおり、飲み食いしてる人がちらほらいる事から、たぶん食堂か何かだろう。

グリスさんがカウンター前スペースの腰掛に向かいつつ言う。

「目の前のカウンタースペース一番右が登録専用だから、あそこいってこい。俺はこっちで待ってる」

「すみません、行ってきましたね」

さっそく行こうとするも、なんか視線を感じる・・・！

具体的には僕の下後方への視線でした。

さすが、猫さん！その愛くるしさは冒険者も釘付けね！

しかし、むさ苦しい男どもが凝視するなんて、猫さんの何かが減ってしまう！

急いでカウンターへ。

「こんにちは。ギルドへの所属登録と、魔物の登録に来ました。」

ギルド職員の制服をきた、都会風なおばさまが対応してくれるみたいだ。

「こんにちは。所属登録と、魔物登録ですね。まずは所属登録から行います。登録にはイルア銀貨1枚掛かりますが大丈夫ですか？」

「はい、持ってます」

首から下げて懷にしまっておりある財布から銀貨を1枚だして渡す。

ちなみにお金は、いくらか婆様からもらっている。

「はい、確かに頂きました。こちらの代金は万が一登録ができないといった場合にも、返却できませんのでご了承ください」

「分かりました」

「あとは、身分証はありますか？」

「はい、あります。あ、あと紹介状もあるのでだしたほうがいいですか？」

「紹介状もお預かりしますね。Bランク以上の方の紹介状なら、すぐに登録できますよ。それでは確認してきますので少し待っていて下さいね」

「はい、お願いします！」

緊張している僕に優しく微笑んで奥に行くギルド職員さん。

おばさまがあと10歳若ければ僕は・・・僕は・・・!!

「にゃっ！」

お、おおっ！じよ、冗談だよ猫さん。僕は猫さん一筋だよ!?そ

の筋10年のベテランだよ!?

「にゃん?」

本当だつて! よーし今日も一緒に寝よう!

「にゃー。にゃん」

ふう、機嫌直してくれたみたいだ。

と、猫さんといじられているとおばさまが再登場。

「身分証の確認がとれました。あと、紹介状のほうも魔力印からSランク、クエス氏の物であると確認がとれました」

魔力印とは、承諾や証明のために自分の魔力と専用の魔道具を使って押すものだ。

つて、あの人Sランクなのかつ!

・・・ああけど不思議じゃないか。床下のにも。

Bが一流、Aが英雄、Sより上は化け物という話は間違ってたのか。

「それでは、身分証をお返しします。あとは、登録作業が終わるまでの間に、ギルドについて説明しますね」

「お願いします」

「はい。まずは、ギルドカードについて説明します。今、確認作業が終わって、ギルドカードの作成を行っております。

ギルドカードは、ギルド所属を示すカードとなっており、高いレベルの身分証となっております。各支部のギルドで使える他、ギルドがある国家への入国が可能となっております。魔力によって識別されますので、盗難されても悪用されることはありませんが、紛失すると再発行に約10枚の銀貨がかかりますので、大事に扱ってください。

また、どこの国においても、犯罪等で手配されますと、ギルドカードは失効になります。刑が終わりますとまたお作りすることができますが、再発行扱いになりますのでお気をつけください。

次に、ギルドランクと依頼について説明します。

ギルドランクとは、冒険者の方々の主に戦闘における力によって、下はGから上はSSSまであります。皆様最初はGからのスタートとなっており、その方のランクにあった依頼を10個以上達成することによって、次のランクへ上がることができます。例外的に、ギルドマスターが認定した場合には、ランクアップが可能です。

依頼は、各ギルドに依頼板がありますので、そこに貼ってある依頼書から自分に合った依頼を選び、カウンターまでお越しく下さい。自分のランクより上の依頼を受けることはできません。下の依頼を受けるのは自由ですが、あまり下の依頼ばかり受けますと、注意を受けますので気をつけてください。

万が一、依頼に失敗した場合、ペナルティーが発生します。重大な失敗や、何度も失敗をするとギルドランクの降格、またギルドカードの失効がありますので注意してください。

また、依頼内容によっては、戦闘力を必要としない、特殊依頼があります。それについては、依頼書にランク分けはなく自身の判断で受けることができます。こちらもちろん、失敗のペナルティーがありますので、お気をつけください。

依頼を達成なされた場合には、ギルドカードに細かい依頼内容と共に記録されますので、それを基に指名依頼をギルドから出される場合もあります。ほとんどの指名依頼は、特殊依頼に分類され、通常より高い報酬が用意されていますので、受ける受けないは個人の自由となっておりますが、受けていただくとギルドと、より良好な関係が築けるかと思われます。

万が一、依頼内容に不備があつた場合には、ただちにお受けになつたギルドに報告をお願いします。そのクエストはキャンセルされ、確認をとった上で、準備にかかった費用なども返却されることがあります。

次に、両替について説明します。

両替は各国どの支部のギルドでも行われておりますので、もし国外に行くご予約がありましたら、ご活用ください。

次に、買取について説明します。

ギルドでは、魔力石、魔物の特定の部位について、買取を行っております。どちらの買取値段も、後ほどギルドカードと共に、お渡しするギルドガイドブックに載っておりますので、詳しくはそちらで確認して下さい。ただし、買取値段は参考値段ですので、それより上下することが多々あります。お気をつけ下さい。

ギルドに関する全ての事柄につきましては、カウンターまでお願い

いたします。この説明は全て、後ほどお渡しするギルドガイドブックに細かく載っておりますので、一度目を通しておいただきますよう、お願いいたします。」

最後に各支部のギルドの見分け方ですが、全てのギルドに羽のマークの看板を出しております。こちら、『どこまでも飛んでゆける』冒険者の方々を表しております。我々はどこまでも飛んでゆけるように、皆様方のサポートをやっていきますので、どうぞよろしくお願いいたします」

「はい！よろしく願います！」

返事はしたものの、目が回りそうだ。

いっぺんには覚えれないな、あとでちゃんとガイドブック読もう。

「はい、それでは何か質問ありますか？」

「えーっと、魔物登録に関しても、説明してもらっていいですか？」

「あら、そっちは登録時説明マニュアルに無かったから忘れてたわ」

なんというマニュアル！

「こほんっ。説明の前に。魔物登録には、イルア銀貨1枚が必要ですが大丈夫ですか？」

「はい。これをお願いします。」

またもや、首から下げた財布から銀貨を出して渡す。

はやく依頼こなさないと、まだ少しはお金あるけど懐が心配だ。

「はい、確かに。それでは、魔物登録についてご説明いたします。魔物登録をなされると、連れている魔物があなたの保護下にあるものとして扱われます。ギルドカードにその旨が登録され、ギルドがあるどの都市に魔物を連れて入っても、制限が掛かりません。ただし、魔物が犯罪を犯した場合などは、あなたにもその罪が及びますのでお気をつけください。」

もちろん、魔物を連れての依頼達成も、あなたの依頼達成とみなされますが、魔物死んだ場合、ご報告いただければご本人の意思により、ギルドランクの格下げも行えますので、覚えておいてください。魔物が逃げた場合や、逃がした場合、ギルドへ速やかに報告してください。」

登録には、とても厳しい審査があります。頑張ってください」

「はい。ありがとうございます。頑張ります！」

ここでミスすると、猫さん送り届けるのが非常に大変になってしまふ。

「それでは、もうギルドカードもできていると思いますので、少々失礼します」



そういい残して、奥に行くおばさまを見送る。

「こちらが、ギルドカードとギルドガイドブックになります。先ほど言いました通り、再発行には銀貨10枚がかかりますので、大事に扱ってください」

「はい、ありがとうございます」

手のひらサイズの銀のカードと、分厚い本を頂いた。

「さて、続いて、魔物登録審査を行います」

「はい！」

よし！がんばろうぜ猫さん！

「にゃん！！」

## 第九話「続・いろいろ登録した日」

「試験は裏の広場でやりますので、すぐ右手のほうの扉の前でお待ちください」

扉の前に立つとすぐに、鍵が開いた音と共におばさまが目の前に現れる。

「こちらの廊下から裏手に行きますので、着いてきてください」

「はい！」

「にゃん！」

長い一本廊下をわたり再度扉を潜る。

そしてギルドの建物の裏の広いスペースに移動。

木人形なんかもあるので、修練とかに使うスペースなのかもしれない。

そして、中央には50台くらいのおじいちゃんが仁王立ちしてる。

「あちらの方が魔物登録試験の試験官ですので、試験を受けてきてください。また後程会いましょう」

「はい、行つて来ます!」

と言つわけで、僕と猫さんはおじいさんの前へ緊張しながらも足を運ぶ。

「魔物登録試験を受けに来ました、キャスと申します。こっちは猫さんです」

「にゃんっ」

「ふむ、礼儀正しいの。わしは魔物登録試験、試験官のバードと申す。よろしくな」

「はい。よろしく願います!」

おじいさんの覇気がすごく本当に怖い、雰囲気ですべて倒されてしまいそうだ。

猫さん、おらにちからを!!

あと神様もできたらお願いします。

「この試験は、様々な状況下で、魔物が主人の言うことを聞くか、人に襲いかかることがないかを見極めるためのものだ！いろいろな状況を再現するため、とても時間がかかる。そして一回でもミスをする和一週間、再試験はできない。また、試験内容も毎回違うので気をつけるように。」

それでは、試験を開始する！！」

「はい！」

「にゃーんっ！」

バードさんの号令のもと、長く厳しい戦いがはじまった。

まずは、普通に魔物が主人の後ろをついて歩くかどうかを見るテストを受けた。

そこから、どこまで細かい命令を聞くかとか、どこまであいまいな命令を聞くかとか、バードさんの指示で僕はとにかくいろいろな命令を猫さんにした。

そのあとも、どのくらい強い衝撃まで攻撃と認識しないか等々、多種多様な試験を受ける。

・・・

僕たちの戦いはこれからだ！

試験があまりに長く、僕も猫さんもくたくた、終わったときには日が傾いていた。

「よし、試験は無事終了じゃ」

バードさんが試験中なにやら記入していたボードを置いて僕らに向かって言う。

「は、はい」

「にゃ、にゃーん」

「早速結果発表じゃが。ここまで息のあった人と魔物を見るのは初めてじゃ！おめでとう、文句なしに合格じゃ！！」

「や、やったー！！」

「にゃにゃーんっ！！」

その場で疲れも忘れて猫さんと抱きあう。

もう僕ら夫婦だよね、猫さん！

ひとしきり猫さんと喜びを分かち合うと、バードさんと共に建物の中へ再度移動する。

僕はカウンタースペースまで戻り、バードさんはこれから登録作業をしてくれるそうだ。

「おう！キヤス君、試験どうだった？」

「グリスさん！！すみません、お待たせしてしまつて。試験受かりましたよ！！いま登録待ちです」

「一応仕事だから、気にするな。それより、おめでとう。よくやったな！」

「ありがとうございます！」

「にゃん！」

「それだけ息ぴったりだからな。そんなに心配じゃなかったが、受かつて何よりだ、それじゃあ、俺は一応確認だけ取って報告に帰るとするか」

「遅くまでありがとうございます！」

「おう」と言つて、そのままカウンターに行くと、おばさまと2、

3 言葉を交わして、グリスさんが戻ってきた。

「よし、それじゃあな！何か困った事があったら、すぐそこが警備隊の詰所になってるから、俺の名前だせばすぐ駆けつけるぞ」

「分かりました！何かあったらお願いします！」

「おう、じゃあな！しっかり稼いで、収穫祭楽しむんだぞ！」

出ていったグリスさんの背中にお辞儀をする。

お使いに出て初めての町で、こんないい人にで会えるなんて幸先いいな！

すぐにカウンターに呼ばれて、おばさまからギルドカードを受け取る。

「裏の記載事項に、魔物認定が書かれておりますので、魔物関係でなにかあった際は、そちらを提示ください。」

「分かりました」

「何か質問等ございませんか？」

「えーっと、魔物同伴が大丈夫な宿屋つてありますか？」

「そうですね、昔から魔物を連れている冒険者はいますので、馬小屋等ある宿屋ならば、相談すれば大抵泊めてもらえますよ。ただ、魔物と一緒に部屋となると、かなり高い料金になって

くると思われます」

「そうですか、わかりました。ありがとうございます」

「いえいえ。もう日も傾いてきましたので、宿屋を探しにいかれるといいでしょう。依頼に関しましては、ギルドは24時間開いておりますので、都合のよろしい時間にお越しください。

それでは、本日はお疲れさまでした。」

「お疲れさまでした。お世話になります！」

そして、ギルドを出るともう日も大分傾いている、早めに宿をさがしたほうがよさそうだ。

人ごみを避けつつ、宿街に向けて移動していると前方から来ていた小さい人影にぶつかった。

「おっと、すみま・・・せん？」



謝ろうとしたときには、すでにその人影は雑踏の中に消えていた。

はたと気づいて、ポケットをあさるも財布がない。

スられた？！

さすが都会・・・なんという早業。

とりあえず、首からさげている銀貨が入っている財布は無事だったのでまだいいか。

婆様に言われた通り、銅貨と銀貨は分けておいてよかった・・・。

しかし、とても幸先がよかった日の最後に、こんなけちがつくなんて。

「はあ、ついてないなあ」

「にゃ〜ん」

猫さんありがとう、元気出すよ！

「よし、気を取り直して、宿探しにいくっ！」

「にゃにゃーん！」

## 第十話「小屋で寝た日」

やってきました宿街。

日も落ちてきて、そこらかしこに明かりがともって、宿屋兼酒場と  
いうところが多いみたいでにぎやかだ。

馬小屋がある宿屋を中心に、交渉して周るとしよう。

「こんにちは。部屋の空きはありますか？」

さっそく目に入った宿屋に入って聞いてみる。

「お、いらっしやい。・・・あー、魔物はちよつとうちじゃあ」

僕の背後を見て言いくそうに告げる店員に、こちら申し訳ない  
気がする。

「そうですか。分かりました。よければ、魔物が大丈夫な宿屋を紹  
介して頂きたいのですが」

「おお！それなら、大樹の枝亭がいいぞ！安いしサービスもいい。  
魔物も専用の小屋がある。獣人の夫婦がやってて、うちをでたら左  
に曲がって、ずっと行くと左手にあるぞ」

「分かりました、丁寧にありがとうございます」

お礼を言って、早速大樹の枝亭を目指す。

「お、あそこかな」

宿の建物の横に魔物用であろう小屋があるので、間違いないだろう。

「こんばんは。魔物連れなんですが、部屋の空きがありますか？」

入ってすぐのカウンターにいた獣人の女性に声をかける。

「いらつしゃいませ。魔物連れだね。部屋は空いてるよ。魔物小屋のほうも今は空っぽだけど、一応ギルドカードで魔物登録されてるか、確認しないと泊められないんだよね」

「あ、登録は済ませてあります。これがカードです」

「はい・・・確かに。それじゃ、合わせて一泊銅貨30枚になるよ。飯は別にかかるから、うちで食べるなら少し安くなるよ」

「それでは、とりあえず10日分で」

「はいよ、それじゃ、銀貨3枚に確かに受け取ったよ」

「えっと、キャスって言います、こっちは猫さんです。よろしくお願ひします」

「にゃーん！」

「はっはっは、賢そうな魔物だね。私はリリーム、見ての通りの宿屋の女将さね。で、あっちでのキッチンを仕切ってるのが旦那のガリオンさ。いい男だよ！食堂で注文とってるのが娘のリリーンよ。可愛いけど手は出すんじゃないよ」

リリィムさんは、獣の耳と尻尾が特徴的な緑の髪の30台女性だ。

ちらつと左手の食堂の奥に見えるガリオンさんは、一見獣人に見えないが、背が高く筋骨隆々のスキンヘッドだ。

リリンちゃんは確かに可愛いが、10歳くらいの、母親そっくりの耳と尻尾で緑髪の子だ。

「これがあんたの部屋の鍵、2階の一番奥だよ。で、こっちが魔物小屋の部屋の鍵、これは入って一番手前だよ。魔物を入れたら外から鍵をするようにね」

「分かりました」

「……さん……！……！……！……！」

「おっ、おっ。どうした猫さん、そんな引つ張らないでくれ」

「にゃん。にゃにゃ、にゃにゃー。」

ううん、なんだ、何かわすれ・・・て・・・

ハッ！

ごめんよ猫さん！今日は一緒に寝ようって言ったじゃないか！

「すみません、リリムさん。できれば猫さんと一緒に寝たいんですが、できますか・・・？」

「は？魔物と？あんた正気かい！？」

「え、ええ。猫さん見た目通りちょっと大きいだけで猫ですし。賢いので！」

「はあ。そうかい。それじゃ、魔物小屋のほうなら今空っぽだし、一日くらいならいいけど。毎日はだめだよ？あと鍵は閉まらないよ？」

「わかりました、すみません、わがまま言って」

「なーに。あんた、なかなか面白そうだしね。明日、怪我してないことを祈りなさいな。あと、今日の分の部屋代は無しにしてやるから」

「え！？けど・・・」

「子供が遠慮なんてするもんじゃないよ！いいから大人の厚意は受け取っときな！」

「はい！ありがとうございます！」

「はっはっは、素直でよろしい。それじゃ、小屋のほう準備しとくから、ご飯まだなら済ませちゃいな」

そう言つてリリームさんが小屋のほうへ。

僕と猫さんは食堂のほうへ移動。食堂はこれから込み合いそうな感じなので、適当な席に座つてメニューをみつつ、リリンちゃんにさっそく注文をする。

「いらつしゃいませ。あの、宿のお客さんですよ。私リリンつていいです、よろしくお願いします！」

「僕はキャス、こっちは猫さんつて言うんだ。よろしくね。いまさただけど、魔物もここで食事して大丈夫なのかな」

「あ、はい！大丈夫ですよ。」

「そうなんだ。教えてくれてありがとう。田舎物から出てきて、初めての都会だからいろいろ教えてくれるとうれしいな」

「もちろんです！」

そんな会話のあとに、今日のお勧めと、魔物用のご飯を注文。ちなみに猫さんはなんでもおいしく食べるし、量も僕と同じでいいので注文が楽だ。

普通の魔物だと、食べれないものとか量とか指定しないといけないので、料金計算とかで結構注文にも時間がかかるらしい。

「お待ちどうさまです!」

そうこう考えていると、目の前においしそうなシチューが登場!

「こちら本日のお勧め! ナナメ鳥のシチューです! そしてこっちは猫さんのご飯です!」

猫さんの前には、綺麗に切られたお肉と野菜、フルーツがそれぞれのお皿に並んでいる。

「おおー、おいしそうだ。頂きます!」

おいしいご飯に、今日一日いろいろあったこともあり、大分空腹もあって、瞬く間にシチューが胃袋に消えていった。

横を見ると猫さんもおいしそうに、フルーツの最後の一切れを頂いてるところだった。

そして、二人揃ってご馳走さま。

お金を払って宿のカウンターに戻ると、リリムさんが待っていた。

「小屋の準備はしといたよ。鍵も一応渡しておくけど、外側からしかかからないからね。最近寒くなってきたから、毛布おいといたから使いな」

「何から何までありがとうございます」

「気にするんじゃないよ！しっかり休みな」

「はい、おやすみなさい」

「ええ、おやすみ」

というわけで、小屋に移動。

部屋に入ると、綺麗に藁が敷き詰められており、上には毛布、ランプが置いてある。



「今日はいろいろあったねえ、いいことばかりじゃなかったけど。まさかスリされるとは……」

「にゃん」

「けど、ギルドで登録もできたし、いい出会いもあったし、総合的にはいい日だったんじゃないかな」

「にゃにゃん」

「そうだね。そろそろ寝ようか」

毛布を猫さんと被りつつ、猫さんに抱き着いた体制で就寝。

空が白みがかったころ、物音がするので起きると、隣に猫さんがおらず、ちょうど部屋のドアから入ってくる猫さん。

その口には、気絶している子供が咥えられていて……

「あれ……一日にして、認定取り消しの危機!？」

番外「ヒロインは・・・」(前書き)

ヒロイン予定の一人をだしてみるテスト。

番外「ヒロインは・・・」

僕の名前はユウリという。

オーステス大陸にあるイルア王国の南、サイ村の出身だ。

昔は凄腕冒険者、今は凄腕村人の父と、昔は可憐な貴族令嬢、今は美人で料理上手な母の3人家族だ。

母親似の容姿、父譲りの赤髪が特徴で、父にはよく「将来ママみたいな美人さんになるぞ!」と言われて育った。

今思えば、父のこの口癖が僕に多大なる影響を与えていたのかもしれない。

幼少期のころ、男の子の遊びをするより、女の子と遊んだほうが楽しかったのをよく覚えている。

僕が女性ならまったく問題ない話であつたのだが、実際問題僕は男性であつたために、幼いながら苦悩した。

子供のコミュニティと言うのは馬鹿にできず、人生のほとんどを村で過ごす村人にとって、子供時代の関係とは将来に渡る関係となる。

そこまで難しいことは当時考えていなかったが、男女の区別がつくようになるにつれ、仲間はずれや悪口を言われるようになった。

そんなときに彼に出会った。

彼は、村の薬師のおばさまの養い子で、当時は村に来たばかりの6歳くらいだったはずだ。

いつもおばさまの後ろを歩き、拙いながらも薬師の手伝いをしていた。

おばさまが、何度か子供たちの集団のほうを指さして、「遊んでおいで」と言っても首を振るだけで、結局おばさまの後についていったのを、なぜか今でも鮮明に覚えている。

おばさまは、元々名のある薬師で、10年くらい前にサイ村に居を構え、小さい村に薬師自体珍しく、腕がいいとなればなおさら珍しく、とても有難い存在であるために、村では尊敬を集めている。

そんなおばさまの養い子である彼、キャス君はおばさまから片時も離れず、仕事を手伝っていた。

当時、子供たちも、いきなり来たよそ者をどう扱っていいか、分からなかったのだろう。積極的に遊びに誘ったりということもなかった。

しかし、子供というのは親を見ているもので、おばさまが村で瞬く間に尊敬を集めると、その養い子であるキャス君も子供たちの興味の対象となり、彼ももともと人懐っこい性格をしており、気づいたときには村の男の子たちと遊んでいる姿を目にするようになった。

そんなある日のことだ。

その日、女の子たち遊ぶために、遊び場に向かっていた僕は、村の年長の男の子たちに目をつけられ、「お前もサイ村の男なら、度胸

試しをやれ！」と、川の少し高く出張っている岩の上に連れてこられた。

今にして思えば、気になるあの子と、男の僕が遊んでいるのが気に食わず、周りに人がいないタイミングを見計らって、少しいじめてやろうと思ったのかもしれない。

散々ヤジを飛ばされ、段々泣きたくなってどうしていいか分からなくなっていく、気づいたら川に飛び込んでいた。

そこまで深くも、流れも早い川ではないので、普通の子供ならおぼれる事は無い川なのだが、いかんせん僕は、ほとんど川遊びもせず、またこのとき、薄いながら服を着たままだだったので、思うように体が動かず、それはもう慌ててしまった。

だんだん意識が遠のく中で、最後に見たのはキャス君の必死に顔だった。

気がつくと、薬の独特な匂いが漂うベットだった。

横を見ると、父と母とおばさまがいて、父が僕が目覚めた事に気づくと慌ててこっちに来た。

「おい！ユウリが目覚めました！おばさまー！」

「あら、本当ね。けどクエス、嬉しいのは分かるけど邪魔だからどきなさい」

「そうね、あなた。いきなりそんな顔で迫ったら、ユウリがびっくりにしてまた気絶しちゃうでしょ」

父がしゅんとして、離れていく。

「気分はどうだい？ユウリ。痛いところとか無いかい？」

「痛いところはありません」

「そうかいそうかい。それはよかった。いきなりうちの坊と子供たちがユウリを担いできたときにはどうしたかと思ったけど」

「あ、そういえば、僕、溺れて・・・？」

「そうだぞ、ユウリ！服着たまま川に飛び込むなんて！」

「あなたは、少し黙っていなさいね」

母の一睨みで父はまたしゅんとなった。

「溺れてたところを、たまたま川沿いで遊んでいたキャス君たちが助けて運んでくれたのよ」

「キヤス坊は見所のあるやつだと思っていたが、さすがおれの見込んだ男だな！」

「キヤス君が・・・」

「それで、何で溺れていたの？」

「うむ。夏とはいえ、服着たまま川に飛び込むなんて、やっちゃいかんぞ！」

父母に真剣に見つめられ、村の年長の男の子たちに連れられていかれ、度胸試しをさせられたことを話した。

「よしちよつと行ってくる」

剣呑な気配をまとうて父が立ち上がった。

「落ち着きなさい、あなた。ユウリが怖がってるわよ」

「むう、しかしだな！」

そこへ、扉を開け村人が駆け込んできた。

「おばさま！子供たちが腹痛起こして大変なんだ！まだ3人だけど、うつるもんだったらずいだろうってじじさま方が言うんで、家まで行って診てくれんか！」

「落ち着きなさい。どこの子が腹痛を起こしているの？」

「ええつと、うちの息子と、コムサのところ長男と、タンダのころの次男だな」

「ん？なんかそいつら、覚えがあるな」

「ユウリに意地悪した子たちじゃない」

「おお！そうだそうだ！天罰でも当たったか！さすがユウリ、神にも愛されているな！」

「クエスはちよつと黙ってなさい。センリ、あなたのところの息子は、何か悪いもの食べたか聞いている？」

「お、おお。おらも聞いたんだが、夕飯前だったから、朝も昼もおらと同じ物たべとるから、違うものと言えば、おばさまのところの坊から貰った団子くらいみたいだ」

「そう。それなら害はないわ。腹痛もすぐ治まるわ。今日あの子が摘んでたのが、たまたま便秘に効く弱い薬草でよかったわね」

「ど、どういうことだ、おばさま！？」

「うちにある薬草は摘んできたら、ほとんど私の部屋においてありますからね。あの子には、危ないから私の部屋には入らないように



言っておりますから。あの子が使える薬草はその日摘んできたやつしかかったのでしょうか」

「そ、そうじゃなくてだな！なんで坊にうちの息子らが一服盛られてるんだ！」

「それは私の後ろの人たちに、聞くのがいいかと思うわ」

それから、母が説明し、父が怒り、センリさんが縮こまり、結局コムサさんとタンダさんのところに行っているいろ、おはなし、したそうだ。

僕は、一日ばばさまのところに泊まることになって、父たちが出て行くのを見送ると、ばばさまに横になっっているようにいわれて、毛布にくるまり目を閉じると必死にこっちに手を伸ばすキヤスクんが思い浮かんだ。

なぜだか胸もどきどきしている。

も、もしかして？けどキヤス君は男だし、僕も男だし。

けどけど、キヤス君は溺れている僕を助けてくれて・・・。

なぜか仕返しまでしてくれて・・・。

けど・・・だけど・・・でも・・・。

一人になって、急にとめどなく思考が流れていく。

なんでこんなにときどきするのか。

キヤス君の顔を見て、お話すればはつきりするんじゃないか。

キヤス君に会いたい、お話したい！

そう思っていると、話し声が聞こえてきた。

「キヤス、あなたは何をしたのか分かっていきますね」

「はい・・・ごめんなさい」

「理解して反省しているようですし、強くは言いませんが、薬師として教えていることは、このようなことに使うためじゃないことを覚えておいてね」

「はい・・・」

「この話はここまでね。ユウリは客室で寝てるから、様子を見てらっしゃい」

キヤス君・・・、僕のためにしてくれたのに。

ああ、どうしよう。さっきまで会いたいと思っていたけれど。

今は会うのが怖くなってきた。

それでも扉は開いて。

「ユウリ、入るよ？」

キヤス君がベットの脇まで歩いてきたが、僕は結局寝た振りをしてしまった。

僕が寝てるのを確認すると。彼はやさしく呟いた。

「ユウリをいじめた馬鹿3人はしっかり懲らしめといたから、安心して。婆様には怒られたけど仕方ないよね。反省はしているけど、後悔はしていないってやつだ。」

キヤス君は、ままた出て行こうとしたので、ついひきとめてしまった。

「キヤス君！助けてくれてありがとう。ごめんね、僕のせいでおばさまに怒られて・・・」

「あれ、ユウリ起きてたのか。どういたしまして。仕返しは僕がしたくてしたことから気にしないで」

「ううん、うれしかったから。ありがとう」

「それならよかった」

やさしく笑いながら、見つめられて僕はどんどん頭に血が上るのを感じた。

それから少し沈黙が続き、焦った僕は、さっきの苦悩もあり、とてもないことを言ってしまった。

「きゃ、キヤス君！僕は本当に君に感謝してるんだ。お礼に、ぼ、僕が大人になったら、キヤス君と結婚する！」

言うてから、じぶんでもすごいことを言ったと気づいたけど後の祭り。キヤス君が何か言ったけど、毛布を被って恥ずかしさのあまり丸まっていたら、そのまま寝てしまっていた。

けど、このとき告白して、僕ははっきり自分の気持ちに気づくことができたんだ。

次の日、両親に連れられて家に帰宅。

父は何でも、「ちょっと一週間くらい山籠ってくる」と言って、なぜか例の3人と一緒に山に向かっていった。

僕は、昨日のことがぐるぐる頭を巡っていて、ぼーっとしてしまっている、母にどうしたのか聞かれて、結局全部暴露してしまった。

そうすると、母が魔法に関する本を何冊か引つ張りだしてきて、その一文を読んでくれた。

「『古代の遺跡から発見された魔道具には、使い方が分からない物や、欠損があり効果が安定しない物などがある。私自信も、遺跡から発掘されたとある魔道具の研究をしていたところ、暴走させてしまい、性別が変わってしまった。そのときは、もう一度暴走させることで、性別を戻すことができたが、そのあとは何度やっても、そのような効果を得ることはできなかった』  
こういう魔道具が、世界にはあるみたいよ」

その日から、僕は母に魔法の勉強を教えてもらうようになった。

それはもう、遊ぶ時間すら惜しいほどに必死に勉強した。

キヤス君も魔法に興味をもって、一度母に習いに来たけど、母がキヤス君には才能がないとはっきり言ってしまったため、何度か来ただけで、全然来てくれなくなったときだけは、母を恨みもした。

そして、12歳になり、あの本を書いた魔法使いがいるウルテム学術国の魔法学院への留学が決まり、出発の日。

勇気を出して、キヤス君の手を握り、

「僕のこと忘れないでね。」

と言つて、村を出発した。

キャス君も、涙を溜めて首を大きく振つてうなずいてくれていたの  
で、きつと想いは通じてる。

僕は、決意と共に村を後にしたのだ。

番外「ヒロインは・・・」(後書き)

だが男だ！

## 第十一話「弟子ができた日」

と、とりあえず、落ち着け僕。

「にゃーん？にゃんにゃん」

猫さんは前足でこちらを叩いてくる。

すごいでしょ、どうどう？ほめてほめて。って感じですね猫さん。

確かに、大きい獲物だろうけど！だろうけども！！

「うちじゃ養えません！もとあったところに返してきなさい！」

「にゃ！？にゃにゃーん、にゃっにゃっ」

なぜか慌てて子供をさらにこっちにおしつけて・・・お？猫さんの口になんか挟まってるな。

「これは僕の財布？あれ、ってことはこの子・・・？」

夕方のスリか！！

灰色のぼろぼろローブに、背丈も同じ。



「猫さんは犯人を捕まえてきたのか」

「にゃー！にゃん！」

さすが猫さんだ！！丘の上の白い家に子供は3人、犬一匹、静かに暮らそう！

「ありがとう猫さん！明日も一緒に・・・あ。けど毎日はダメって言われたからな・・・」

「にゃーう・・・？」

ああそんな悲しそうな顔で鳴かないで！

「よ、よし、こっそり！こっそり一緒に寝よう！」

「にゃー！にゃん」

ふはは、よしよし可愛いやつめ！

「・・・」

おっと、スリ（仮）さんが起きてしまう。

とりあえず、縛っておくか。

「うっん？あれ．．．どこど．．．？」

起きたな。

「寝てたらいきなり大きい獣が目の前に．．．」

「にゃん」

どうやら猫さんは寝ているところを連れてきたらしい。

「っ！？ま、魔物！？わ、私を食べてもおいしくないよ！？肉付きもよくないし！」

「あー、混乱してるところ悪いけど．．．」

「．．．あんたは．．．。ハッ！お、オレを攫つても金にはならないぞ！こ、こんな貧弱な男じゃ、値もつかないからな！」

猫さんに気づき、慌てる子供に声を掛ける。

しかしのその返答は見当違いでびっくりだ。僕が人攫いにみえるというのか。

「にゃん」

前足で猫さんが慰めてくれる。

僕がんばるよ！

「別にお金を要求するわけじゃないけど。僕の財布をスったのは君だよな？」

「な、そ、そんなことしてないぞ。夕方はスラムにいたし！」

盛大に自爆する子供に、何故か僕は怒りがわいてこなかった。

「ああ、うん。夕方、ね……。まあ、君と一緒にこんなものも出てきたんだけど、僕の財布だから返してもらおうよ。小銭しか入れてないけど、一応大事な人から貰ったものだからね」

「す、好きにすればいいだろ！お、オレは何もしらないぞ！」

「あー、はいはい。まあ、あんまり人さまの物に手をつけないようにね。この子が加減間違えるってこともあるかもしれないし」

猫さんをなでつつ、一応忠告しとく。

「お、オレだって人を見て商売してる！今回はたまたま、運が悪かったただだ！」

「・・・お前そんな正直モノなくせによくスリなんてやってるな」

さすがの僕でも、この自爆っぷりには呆れるばかりだ。

「な、あ！・・・だましたな！」

「いやいや、勝手にしゃべっただけじゃん！」

「う、うるさいうるさい！お、オレを警備隊に突き出すつもりか？」

「いやいや、財布じたい諦めてたけど、猫さんが見つけて持って帰ってきてくれただけで、君は猫さんがついでに持って帰ってきちゃった？感じなんで、もう帰っていいけど、取り返しつかなくなる前に犯罪はやめて、職を探したほうがいいと思ううよ」

昔、都会に住んでたじいさんが村にいて、いろいろ聞いた話の中には、手癖の悪い子供がたまたま手を出したのが冒険者の懷で、子供の腕一本消えた、なんて話をしてたからなあ。

しかし静かだ、何か言い返されるかと思ったのに。

子供の様子を見ると、うつむいて震えていた・・・

「何も知らないくせに！！スラムの親なしの子供が、一人で生きていくのがどれだけつらいか！スラムの子供なんて、雇ってくれるのはもっと危ないところか、色町の店くらいさ！まだ、スリをしてゴミを漁っていたほうが長生きできる！」

涙を浮かべて叫ぶ姿を見て、かなりショックを受けた。

自分と同じか、少し年下の子供から、そんな言葉がでてるなんて・

僕は、両親はいなかったけど、ずっと婆様に守られて生きてきた。

だから、知らないことがたくさんある。

なのに偉そうに、職を探せと言うのは軽率な発言だったな。

貧しい人みんなに職を探すなんて、僕にはできない。

けど、関わってしまったのなら、せめてこの子は助けたい。

取り返しのつかなくなる前に・・・！

「職を探したほうがいいなんて、軽い気持ちで言ったのは悪かった」

「あ、いや、お、オレも、財布盗んでおいて、偉そうにわめいてごめん……」

「いや、気にしてない。けど、取り返しのつかなくなる前に、やめてほしいってのは本心だ」

「お、オレだってやめれるならやめてる！けど、他にできることがない……」

「僕が、お金を稼ぐ方法をおしえるよ」

「はあ！？お前が！？」

「こう見えても、凄腕薬師の弟子なんだ。ハロース周辺で採れる薬草と、薬の作り方をおしえるよ。冒険者向けに作って、露店にだして売れば稼げるはずだ」

今日、ギルドの行くときに露店の品物をみたけど、結構簡単な傷薬やらがそこそこの値段で売ってたし、どうにかなるはずだ。

最悪、僕もそれで稼ごうと思ってたし……！

「な、なんでそこまでしてくれるんだ？お、オレに返せるものなんてないぞ？」

「うーん。軽率な事言って傷つけたお詫びと、大事なことに気づか

せてくれた御礼かな？」

「なんだよ、それは……。けど、教えてくれるなら、習いたい……」

まだ少し疑い顔だが、別にいい。これから信じてもらえばいいんだ。

「よし、決まりだ。それじゃ、細かい話は宿でしようか、部屋もとつてあるから」

「え、お金なくて馬小屋で寝てたんじゃないんだ？」

「あー。猫さんと添い寝するために小屋で寝ただけで……」

「そ、そうなのか」

ひ、引かれた！！

「と、とりあえず、移動しようか！そろそろ朝食の時間だろうし！おごるよー！」

「いいの！？」

「僕の指導は厳しいからね！しっかり体力つけないとね」

おっと、すっかり忘れてた縄を解いてつと。

あ、そういえば自己紹介も忘れてた！

「宿に行く前に。僕の名前はキャス、冒険者だ。こっちは相棒の猫さん、器量よしの猫っばいなにかだ。よろしくな！」

「にゃーん」

「お、オレ・・・じゃない。私はレカです。南のスラムに住んでます」

「ん？もしかして女の子？」

言われて見れば、そうかなって感じだが、喋り方があれだと全然分からなかったな。

「うん・・・はい。普段は、男に見られたほうがいいので、男のふりをしてるんだ・・・です」

「なるほどー。あと無理に敬語じゃなくていいよ」

無理に敬語を使うレカをみて少し笑ってしまう。

「い、いいの？」



「いいよいいよ。ただし、僕のことは師匠と呼ぶように！」

「し、師匠？分かった！キャス師匠！」

師匠・・・なんて甘美な響きなんだ！！

「よし、それじゃ、食堂までいこうか！」

「はい、師匠！」

## 第十二話「からまれた日」

宿の食堂でご飯を食べると、リリームさんに部屋の鍵を貰う。

そのときに、レカについて聞かれたので、僕が薬師だということを話して、その弟子ということだけ伝えておいた。

そのまま部屋に入ると、狭いながらベットと机があったので、僕は机の椅子に腰掛け、レカをベットに座らせて話をした。

「まず、レカにはある程度、ゴブリンくらい倒せるだけの力を身につけてもらいたんだけど、現時点で倒せるかな？」

「私、町の外には出た事無くて。魔物を見るのも師匠の猫さんがはじめてで……」

ちなみに猫さんも部屋にいる。

リリームさんに「あんたのところの魔物はやたら行儀いいわねえ。普通、魔物は寝てるときに人が近くによったら無条件で吼えるから、宿とは別の小屋なのに、あんたのこの子は、昨日夜様子見にいったときに、ぜんぜん吼えないで、ただジーンと私を見てるだけだったのよ。そんだけ馴れてるなら、部屋のほうで一緒に寝てもいいわよ。ただし、うるさかったら小屋に逆戻りだけだね！」と言われて、晴れて部屋で一緒に寝るようになったのだ。たぶん、僕が今日も猫さんと一緒に寝ようと企んでたことなんて、お見通しだったんだろうな……。

しかし、これで今日からも一緒に寝れるよ猫さん！旅に出てからず  
っと一緒に寝てたからね、もう僕猫さんなしじゃ夜も寝れない体に  
・  
・

「師匠？」

「ハッ、ちょっと考えごとしてた。ごめんごめん。とりあえず、僕  
もそこまで蓄えがあるわけじゃないから、今日さっそくギルドの依  
頼なりを受けて、できればお金を稼いでおきたいから、なるべく町  
の外の簡単な依頼を受けて、道中薬草についての説明とか、戦闘に  
ついてを教えていこうと思う、ここまではいいかな？」

「はい！」

いくら大きな町の周辺だからといって、薬草を取りに行くのに襲わ  
れないとは限らないので、ゴブリンくらいは倒せるようになって貰  
わないと困る。

「よし、次は、レカの装備についてだけど、なんか武器になるよう  
なものは持つてる？」

「えっと、何かあったときのために、ナイフなら一応、寝床にある  
よ」

「そっか、それじゃ、後で取りに行こう。あとは防具は、ゴブリン  
くらいなら気にしないでいいけど、あとで服と靴は一式揃えようか」

「え、このままじゃだめ？」

「お金は出すから。ボロボロの服と靴じゃ怪我するし」

藪の中を歩いたりするので、しっかりした服と靴じゃないとたちまちボロボロになってしまう。

「うー、分かったよ」

「じゃあ、まずはレカの服と靴を揃えて、それからレカの家に行つて、ギルドにいこうか」

レカの了承を聞いて、僕は今日の行動予定をレカに伝える。

「あれ？もしかして、師匠も私の寝床くるの？」

「ん？そのつもりだけど、だめなの？」

興味もあるので行つて見たいのだが、レカは微妙の反応を返してきた。

「い、いや、いいけど。スラムは危ないから」

「こつ見えても、猫さんは強いから、何かあつても平気だよ」

「にゃん！」

猫さんに倒せないような人間がいるとすれば、町自体が危ない。

「そつか。うん、わかった。けど、寝床すごいぼろいからな！驚くなよな！」

レカが何度も念を押して言うてくる。しかし、スラムと名のつく場所に、ボロ家ではなく、普通の家が立っていたらそっちのほうが驚きだ。

「はいはい、わかりました。それじゃ早速行こうか」

「はい」

「にゃーん」

それから、朝の商工区を周って、冒険者御用達つぱいところで、とりあえず安い靴と服を購入してそのままレカに着せる。

レカは最初恥ずかしそうにしていたが、着替えたあとは嬉しそうにはにかんでいたので、僕としても得するものがあつた。いい笑顔です。

次に、レカの家にいくために南スラムに入る。

商工区とは雰囲気さがらつと変わって、なんとも暗い感じだ。

地面にそのまま寝ている人も目立つ。

ちよつと行くとすぐに、家というか小屋というか廃屋というか、そんな建物が見えてきた。

「ここが私の寢床だよ」

「あーうん。引っ越そうか」

見た瞬間僕の中でレカの引越しは決定した。

「え！？急にどうしたの師匠！？」

「うん、これはさすがに」

ない、女の子の住む場所では断じて無い。

「だから、ぼろいって言っただじゃん！」

限度と言ったものがあると思うんだ。

「僕と一緒に宿でいい？」

レカの抗議には取り合わず、僕はとりあえずの宿を提案する。

「え、もう引っ越すの決定なの！？」

「うん。ちゃんとした環境じゃないと、技術っていうのは身に着かないよ！」

驚くレカに適当ないいわけを返す。

「いや、薬って別に寝床は関係ないんじゃない？」

「師匠の言葉に反論しない！お金なら出すから、とりあえず宿に引っ越そう？」

もし嫌だと言っても強引に連れ出す気満々である。それくらいここはひどいと思う。

「うー、分かったよ師匠。どっちにしろ、ここもそろそろ危ないと思ってたから、引越そうと思ってたし。お金は借りとくだけで。あとで絶対返すから！」

「分かった。薬で稼げるようになったら、返してくればいいから受け取る気などあまりないのだが、こう言っとけばレカも納得するだろう。」

「それだと結局師匠におんぶに抱っこだけど……。約束だからね！お金稼いだら、絶対受け取ってよ！」

と思っていたら、レカに念を押された。なぜばれた！

「はいはい。それじゃ、ひとまず荷物まとめて、大樹の枝亭に行こうか。そのあとギルドに行こう」

それから、十分もしない間にレカの荷物が纏まった。僕は、レカのあまりの荷物の少なさにびっくりして声を掛けた。

「荷物それだけ！？」

「うん。こんなところに何か置いててもすぐ無くなるしね」

一抱えしかないレカの荷物を受け取り移動する。

自分で持とうとするのでふんだくってやった。

「そつか。それじゃあ、行こうか」

廃屋を寂しそうに眺めるレカの横顔に、それ以上は聞かずに宿へと向かおうとすると、急に声を掛けられた。

「おい、レカあ。久しぶりだなあ。稼ぎはどうだ？ちゃんと、お・し・ご・と、してるかあ？」

いかにもな奴がにやにやと笑いながら、レカに話しかけて来た。

「ん？おい、そっちのにちゃんはだれだよ？客か？とうとうお前も後ろの穴売るようになったのかあ？」

あ、なんか、もすぐイライラしてきちゃったな！どうしてくれようか、このチンピラ・・・！

「（師匠、落ち着いて。私が話すから、ね？）」

小声でレカに言われたので、爆発寸でのところで黙る。



「ちょっと、昔の知り合いが尋ねてきただけだよ。こいつ、今は冒険者しててね。ほら、この通り、魔物連れているいろやってるみたいでさ」

僕の後ろにいる猫さんを指差してレカが言う。

「ぐるるるっ」

猫さんもチンピラが自分を見てくると低く唸って威嚇する。

さすが猫さん、僕の心を感じ取ったんだね、僕らは一心同体だ。

チンピラは、唸る猫さんを見ると、ぎょつとして、口早に「お、おう、そうかよ。にいちちゃんも、冒険者かなんか知らないけど、あんまここで大きい顔するなよ！んじゃ、俺はもう行くぜ！」と、言っただけで去って行った。

それを見送りながら、レカはおかしそうにしている。

「あいつ、ガリスって言うて、ここらの裏を取り仕切ってるやつの子なんだ。まあ、息子がいっぱいいて、その中の一人なんだけど。あいつ、息子の中じゃ実力なくて、あんまり大きい顔できないから、スラムでだけ、あんな態度なんだ」

「なるほどね。あんまり係わり合いになりたくないタイプだってことは分かったよ」

「そうだね。弱いものいじめしかできない奴って、ここでも陰口叩かれてるよ」

「かわいそうに。まあ、そんなやつのは置いといて、とりあえず宿に戻るつか」

「はい、師匠」

嬉しそうに返事をするレカを引き連れて宿にもどったのだった。

## 番外「ヒロインが・・・」

私の名前はレカ。

ハロースの南スラムに住む孤児だ。

もともとはここより少し北に位置する、色町に娼婦の母と二人で住んでいた。

母は教育熱心だった。「あんたは私みたいになるんじゃないよ」というのが母の口癖だった。

父はおらず、母にそのことを尋ねるとあまりいい顔をされなかった。

昔、酔った母が

「あなたのお父さんは、貴族さまだったのよ。あんたがお腹の中にいると伝えたら、名前考えて、絶対に向かえに来るって言って、少しのお金を置いて、それっきり。薄情な男さ。貴族なんてみんな、平民を・・・」

そのあとは延々と愚痴が続いた。

結局、父のことを聞いたのはそれっきりだったし、それ以降聞こうという気も失せたのだった。

父はいなくても、母の愛を感じ、生活は苦しくも、雨風を凌げる家

があることはとても幸運であつたことを知るのは、母がお客ともめて殺されたと知ったときのことだった。

その日、いつも帰ってくる時間に母が帰って来ず、心配になってきたときのこと。

家の前から私を呼ぶ声が聞こえて、急いでドアを開けに行くと、そこにはお隣の部屋のお姉さんが立っていた。

お姉さんも娼婦で、母と職場も一緒だった。

そんなお姉さんが急いだように、息せき切って私に告げた。

「いい！？落ち着いて聞きなさい。あんたのお母さんが死んだわ。たちの悪いお客さんからまれてね。もう娼館では、あんたのお母さんが悪いってことで話がまとまってしまっているわ、お母さんは全然悪くないのにな。」

お母さんは、娼館に借金してたから、あなたをその形に連れていこうと、娼館の使いがすぐにこの家に来るわ。いますぐ、最小限大事な物だけ持って、逃げなさい！

お母さんの死体は、スラムに捨てられると思うけど……。できるならスラムには近寄らないほうがいいわ。

こんなことしかしてあげられなくて、ごめんね。あんたのお母さんには恩がいっぱいあるのに……。

私はもう行くわ。すぐに逃げるのよ？いい？分かったわね！」

茫然自失の私に、お姉さんは念を押して帰っていった。

気づいたときには、南スラムを彷徨っていた。

そして、何時間か彷徨い、私は母を見つけた。

裸で雨に打たれ、冷たくなった母を。

その死体にすがりつき、ひたすら泣いたが、気づいたら眠っており、起きても動かない母を見て、その死を実感すると、急に不安に押しつぶされそうになった。

悲しくて、怖くて、寂しくて……。

どんどん不安になっていった。

「おい、讓ちゃん。こんなところで何してやがる」

いきなり声を掛けられ、振り向くと、人相の悪い、ぼろぼろの服を着た男がこちらを見ており、どことなく剣呑な雰囲気飲まれた私は、一目散に駆け抜けた。

ひたすら走って、走って、たどり着いたのは一軒の廃屋だった。

そこで一晩明かして、また母のところにいったところには、母の死体

は無くなっていた。

スラムに住むようになってしばらくして知ったのだが、あそこは死体置き場で、わけありの死体があそこに放置され、お金をもらったスラムの人が処理するのだという。

人間にながっても、お腹は減って、けどお金は無く、手元にあるのは母からもらった数冊の本と着るものくらいだった。

結局、その日は母と共にきたことのある古着屋に服を売って、露店で食べ物を買って食べ、廃屋に帰って寝た。

しかし、そんな生活が長続きするわけもなく、本も売ったが、そのお金も無くなり、途方にくれていた。

そこに、当時、南スラムの子供をまとめていた子が来て、私をスラムの子供の寝床になっている一角に連れてきたのだ。

なんでも、昔お世話になったスラム出身の人に頼まれて、ずっと探してくれていたそうだ。

その昔お世話になった人とは、隣のお姉さんだった。

そして、リーダーは私に寝床をくれ、スラムで生きるための様々なことを教えてくれた。

仲間もできた。

仲間と共に、盗みもした。

生き残るために必死でゴミを漁った。

しかし、仲間はずんずん減っていった。

甘い言葉を鵜呑みにして、娼館に身売りしたり、チンピラに使い潰されたり、犯罪で捕まった者もいた。

警備隊に捕まった仲間はまだましなほうで、冒険者にちよつかいだして捕まったり、ハロースの裏を取り仕切っているやつらに捕まった仲間は、怪我をしたり、ひどいものは帰ってこなかった。

リーダーもそのうち娼婦になり、スラムには顔見知りがいる程度で、仲間と呼べる奴は消えてしまった。

また孤独になったが、仲間たちに教えてもらったスリの技術があったので、食うに困らないくらいの稼ぎはあった。

そのうち、私も女っぽくなってきて、何度が襲われそうになり、女ということ隠すために、口調を変え、髪もばつさり切った。寝床も定期的に変えるようにした。

そんなある日、私はいつも通り、仕事に勤しんでいたら、たまたま田舎モノっぽい男を見つけた。

どうみてもカモで、雑踏の中を右往左往しているところを『お仕事した。』

その瞬間、男の後ろに大きい獣が見えたが、すぐに雑踏に紛れ込ん

だので、  
いったいなんだったのかは分からなかった。

しかし、  
それが運命の出会いだったのだ。



番外「ヒロインが・・・」(後書き)

ヒロインが3人目。

猫、男、幼女・・・なぜこうなった・・・

### 第十三話「初依頼を受けた日」

宿に入ってすぐ、リリームさんに部屋の空気が無いか聞いたたら、呆れ顔をされてしまった。

「あんた、冒険者成り立てでしょ？そつちの子もお金もってるようには見えないし。2人とも個室で大丈夫なの？2人部屋で、魔物も部屋のほうで寝るなら、問題起こさない限り、結構安くするわよ？」

「僕はそつちでもいいけど、レカは女の子だし「安くなるなら2人部屋でいいです！」・・・本当にいいの？」

「師匠は信用してるし。安くなるならそつちのほうが絶対いいよ」

「レカがそう言うなら。2人部屋をお願いします」

なんか、無条件に信用されるのはくすぐったくもあり、嬉しいな。

そんなわけで、ほとんど使わなかった一人部屋から二人部屋に移動。

一人部屋よりちょっと広いスペースにベッドが2個あり、ベッドの間にはテーブルがある。

自分の荷物を片方のベッドに置いたら、なにやらベッドでうれしそつにごろごろしているレカに話掛ける。

「まだ、そろそろお昼だし、ギルドまで行ってお昼食べてから、依頼を受けようとおもっただけど、どうかな？」

「はい」

「なんか、やたらうれしそうだね、レカ」

「だって、ベットなんてすごい久しぶりなんだもん。へへー」

また、ごろごろしだすレカを引きずって部屋を出た。

ギルドに行つて、レカと猫さんと食事をとると、依頼の張つてあるボードの前にく。

階級ごとに別れている依頼と、特殊依頼をざっと見て、よさそうなものを探していると、ちょうどGランクでゴブリン討伐の依頼があった。

内容も、ハロース近くの村に棲みついたゴブリン少数の討伐というお手ごろ具合。

さっそく、カウンターにギルドカードと共に依頼書を出しに行く。

「このクエストを受けたいのですが」

「はい。ただいま確認いたしますので暫くお待ちください」

そういつて、職員さんはカードと依頼書をもって奥へいつて、すぐにもどつてくる。

「こちら、カードをお返しします。ゴブリン討伐の依頼を受領いたしました。一度、村に寄つていただいて、詳しい場所などの確認をしてください。そして、依頼が完了しましたら、確認してもらつてください。確認が終わりましたら、こちらの依頼書に村長の魔力印を押してもらつて、それをギルドに提出していただければ、依頼達成となり、報酬が支払われます。説明は以上ですが、何か質問ございますか？」

「大丈夫です」

職員さんは綺麗な声で長い台詞をすらすらと言つてのけた。さすがプロだ。こういうプロフェッショナルな人を見ると、ギルドは信用できそうだなと思う。逆に信用を得るためにこういう教育もしっかりしてるのだろうか。

「それでは。いつてらっしゃいませ」

「はい！いつてきます」

職員さんの綺麗なお辞儀に見送られて、猫さんとレカを連れてギルドを後にした。

ゴブリンが多くても10匹程度とのもので、特に用意するものも無く。

早速、西門からハロースの外へでて、依頼書の村へ向うことにする。歩いて2時間程度の距離だったので、道中少ししか薬草について話ができなかったけど、レカは飲み込みが早く、僕なんかよりよっぽど頭がよさそうだ。

「これが、擦り傷に効く薬草。こっちはただの雑草。ちょっと見分けにくいけど、葉っぱの先が違うからね。覚えて置くように」

「本当だ、こっちのほうで葉っぱが丸いんだね！」

「当たり前。間違っても怪我人に雑草を刷りこまないように気を付けるんだよ」

「はい」

とまあ、こんな風にしてあつという間の2時間だった。

そして村が見えてきて、柵に近寄ると、若い村人に止められる。

「なんだお前は！」

明らかに猫さんを見て同様する村の人。こんなにかわいいのにどこに同様する部分が・・・はっ、猫さんのあまりの可愛さにか！

「ギルドの依頼で来ました、冒険者のキャスと申します。村長さんはいらっしゃいますか？」

馬鹿なことを考えつつ真面目に返答する。

「おまえが・・・ちょっと待ってろ、村長を呼んで来る」

と言って、若い村人は走って村のほうへ。

すぐに、30台くらいのたくましい男の人が来る。

「私がこの村の村長の、デイルです。このたびは依頼を受けてくださりありがとうございます」

「は、はい。こちらこそ?」

やけに低姿勢の村長に、驚いて変な返しをしてしまう。

「はっはっは。いや、魔物を従えているなんて、お若いのに大したものですね」

なるほど、猫さんをつれているからか。まあ確かに猫さんは強そうな雰囲気もあるしなあ。僕から見れば、愛くるしい雰囲気のほうが百倍だが。

「いや、まだまだ駆け出しの身です。この子も、力で従えているわけではありませんので」

あまり過大評価されるのは嫌だしなあ。

「なるほどなるほど。しかし、そのようなお強そうな魔物を連れてくる冒険者の方が、依頼を受けてくださるなんて、心強いかぎりですよ」

聞く耳を持つてもらえない!

仕方ない、仕事の話をしよう。

「それはそうと、ゴブリンが出るそうですが。具体的にどの辺りで、

出るのでしょうか」

「おお、さっそく退治してくださるのですな。ゴブリンは、村の裏手の山に縄張りを作っておりまして、何度か村人でも山狩りをしたのですが、ゴブリンと侮っていたら、若い者が命を落としてしまいました。これ以上は被害をだしたく無く、ギルドに依頼したのです。数のほうは大体10匹くらいだと思います」

「なるほど、わかりました。早速行ってきましたよう。終わったら、また戻ってきますね。確認のほうはどうしましょうか？何か切り取って持ってきますか？」

「それでは、ゴブリンの右耳をお願いします。それとできれば、終わりましたら、ここに警備の者がいつでもいますので、それに私への伝言を任せてもらってよろしいですか？言いにくいことですが、そちらの魔物を怖がる村人もおりますので。もちろん私は、人に従っている魔物の有用性を分かってはいるのですが、村人の中にはそういうものばかりでもないものでして」

なるほど、だから今も門前なのか。

しかし猫さんの愛くるしさをこの村で宣伝できないのか。

「分かりました、それでは行ってきます」

「はい、お願いします」



そして、村の裏手の山へ。

「むー、猫さんこんな可愛いのに、怖がるとかありえないよ！」

レカがむくれて僕に言ってくる。

「にゃん」

「さすが、僕の弟子！よくわかってるな！しかし、猫さんはやらないぞ！」

「師匠って猫さんのことになると、人が変わるよね」

「狂おしいほど愛してるからね！」

「にゃん！」

変なものを見る目で弟子に見られた・・・

「のろけはこのくらいにして、仕事をしようか」

「はあ。けど師匠、この山結構広いし、見つけるまで時間かったら、最悪野宿かな、村入れないし。」

真面目にお仕事をしようとする、なぜか弟子にため息を吐かれた。

「うーん、たぶん猫さんなら探せるはず！」

困ったときの猫さん頼りというわけで、猫さんにゴブリンの気配を探してもらうことに。

程なく、猫さんが一鳴きすると、着いて来いといわんばかりにお尻をふりふり歩き出したので、着いて行く。

そんな雄雄しい猫さんも可愛いよ！

トリップしていると、ゴブリンが集まって何かを食べているところに遭遇。

息を潜めて、確認をとる。

「猫さんはいつも通り、後ろから狙撃でおねがい。レカは今回は猫さんの後ろに」

「にゃん！」

「はい、師匠！」

「それじゃ、さくつと行こうか」

作戦会議もすんで、さっそくゴブリンの群れにお祈りして突撃。

おれ、この依頼が終わったら、猫さんと教会行ってお祈りするんだ・  
・。

そんなことを考えてるうちに終了。

猫さんはどんどん狙撃も早くなってきた、本当に肉壁しかすることが無くなってきた。

そのうち、僕が突撃するまえに猫さんの狙撃でおわりそうで怖い。

ともあれ、依頼も済んだので、魔力石を回収し、戻ろうとすると、レカが呆然と立っている。

「どうしたの、レカ？」

「ハッ！？師匠！なんなの、あの猫さんの攻撃！猫さんみたいになつことできる魔物いっぱいいるの！？それなら、町から出たくないんだけど！それに、師匠も！全部敵引き付けたのに、攻撃全然当たって無いし！どうなってるの！？」

レカが興奮して言うてくる。

「いや。猫さんみたいのは早々いらないから安心なさい。町の周辺にはそこまで強いのはいないよ、いてもすぐ討伐されるし。猫さんは特殊だから、あんまり気にしないでいいよ。僕も結構鍛えてるからね。ゴブリンの棍棒くらいじゃ怪我しないから、逆に余裕もって避けられるだけだよ。ああ、けどレカは無闇に攻撃受けちゃダメだからね、痛いと思うから。それよりも、ゴブリン一匹程度ならレカでもなんとかかなりそうだったでしょ？」

実際当たつてもどうもないのは知ってるので、心に余裕を持てれば、クエスさんにたまに鍛えてもらっていたこともあり、それなりに対処できる。

「あー、はい。けど、猫さんにあまりに驚いて、そこまでちゃんと見てなかったけど」

「なるほど。まあ、十匹を一人で、つてなるときついかもしれないけど、慣れてくれば対処できるし、頑張つていこうね」

「分かった、頑張るよ!」

「元気があつてよろしい!それじゃ、村に戻つて魔術印もらつてかえりましょ」

「はい」

つてな感じで、比較的楽に初仕事を終えたのだつた。

#### 第十四話「再度呼び止められた日」

ゴブリン討伐の後、村の門にいた村人に頼んで、村長さんを選んでもらった。

驚いた様子の村長が来て、耳を確認してもらい、魔力印を押してもらった。

どうにも山の中ということもあってかなり時間がかかると思っていたらしく、短時間で終わってしまったことに畏怖したのか、さらに低姿勢になってしまった村長さんに見送られ、帰途につく。

まだ明るいが、ハロースに着く前に暗くなっても困るので、少し急ぎ足で町へ。

そんな帰り道で、ちょうどゴブリンが1匹だけうろろしていたので、レカに倒させることに。

「ゴブリンはそこまで力も無いし、知覚範囲も狭いから、相手が気づくまで忍び足で近づいて、気づかれたら一気に近寄ってナイフで切りつければ大丈夫だよ。首か胴体の中心を狙えば、ほぼ一発で倒せるよ。万が一はずしても、ゴブリンは動きも遅いから、落ち着いてもう一回狙えばいいから。さあ、いってみよう!」

「い、いきなりだね、師匠。さすがに怖いんだけど・・・」

レカにアドバイスをして背中を押す。

「やらないと覚えないからね！少くらしい怪我したって、僕のすこいきずぐすりであつという間に治るから、頑張つといで」

「にゃーん」

「ほら、猫さんも激励してるから」

だれかを応援する猫さんもかわいいよ！

「うー。分かったよ。行つて来る」

恐々といった感じで、レカがゴブリンに向かって歩いていく。

結構な速度で近づいて行くけど、全然気づかれない。

そして、そのまま一気に間合いを詰めて、一閃。

首を切られ、倒れるゴブリン。

いやいやいやいや！あんな怖がつてたくせに、やけにあっさり、しかも切りつける瞬間まで気づかれずに倒しちゃったよ・・・

さすが、元スリとも言えいいのか・・・

そんなレカが走って戻ってきて・・・なぜ僕に抱きつく！？

「怖かったよお！見つかった瞬間目が合って！！もう何がなんだか！」

「傍から見たら完璧だったんだけどなあ」

本当に綺麗に倒してしまふのだから、教えることもどんどん減っていきそうだなあ。

「怖いものは怖いんだよ!」

「安定した生活のために、慣れるしかないな!今回は良くできました!」

と言って、頭を乱暴に撫で回し励ます。

猫さんも、テシテシとレカを叩いて慰めているようだ。

なんという愛くるしさ!

そこからは、特に何も無くハロースへ帰還。

「ハロースよ、私は帰ってきた。猫さんとの愛を成就させるために・  
・・!」

「何言ってるの、師匠。はやくギルドへ報告しに行こうよ」

「あ、うん」

少し台詞の気分に浸たろうとしていたら、弟子が冷静に先を急かしてきた。

ちょっと寂しい思いを抱きながら、門を潜ろうとするとまた声が掛けられる。

「その冒険者、止まれ！」

このパターン、昨日と同じ！

そう思い振り向くと知った顔だった。

「グリスさん！」

「よ！早速友達とお仕事か？」

気さくに手を上げて返事を返してくるグリスさん。

「えーっと、友達じゃなくて弟子です」

「え、弟子？」



「はい、僕が薬師なので、その弟子なんです」

「ほー、そうなのか。昨日は見なかったが、あの後弟子をとったのか？」

「あー。そんな感じですね」

さすがに猫さんが拉致してきたとも言え無いし。

「ほう？なるほど」

グリスさんはレカのほうを見る。

「坊主、名前はなんて言うんだ？」

「えっと、レカっていいいます」

レカは怯えているようだ。グリスさんの足元を見て話している。

「グリスさん、レカは女の子だから」

「おっと、これはすまん」

「いえ、そんな」

どうも、レカはグリスさんが苦手みたいだな。

さっきから、少し挙動不審だ。

「さて、キヤス君。ちょっと時間あるか？もちろん、お嬢さんも一緒に。お茶くらいだそう」

グリスさんはたずねてる割には有無も言わさない感じだ。

「えーっと、分かりました」

グリスさんに連れられて三人と一匹で門の詰所へ。

部屋に入ってすぐ、グリスさんが切り出す。

「早速だが、レカちゃんはスラムの子か？」

「・・・はい、そうです。私はスラムに住んでました」

レカはうつむいて答える。しかしなんでグリスさんがそんなこと知ってるんだろう。

「やっぱりか」

「えっと、グリスさんはレカと知り合いなんですか？」

「いや、一方的に知っているだけだな」

「それって・・・」

「ああ、何度か追いかけてこしたことが、な」

あちゃー、どうするかな。

最悪、別人で通すか・・・？

「勘違いするな。別にそのときのことをどうこう言おうとは思っていない。そもそも、スラムなんてものができて、子供が食うに困るような暮らしを強いられるのは、俺たちのせいでもあるんだからな。さすがに、現行犯でもないのに、捕まえようとは思わない。そうじやなくて、スラムの子供ってことは、身分証が無いだろう？ キャス君と一緒にいいが、一人で町から出ると、入れなくなるぞ。」

「え・・・！？」

「ど、どうしたらいいんでしょう、グリスさん」

グリスさんから予想外の言葉が連発して同様する僕とレカ。

「うーん。ギルドカードがあるなら大丈夫なんだが。あれ作るのに、身分証いるしなあ。ランクB以上で本人が直接紹介すれば、身分証いらならしいが。あとは、身分の高い人に保証してもらえれば、庁舎でハロースの身分証を出してもらえるとと思うが」

「Bランクはさすがに・・・いや・・・うーん、最悪クエスさんを呼びに戻って連れてくれば・・・。身分高い人の知り合いなんて

いないしなあ」

クエスさんなら来てくれそうだけど、迷惑かけるのもなあ。

「まあ、何にせよ、一人で町からださなければ大丈夫だ。こっちでも少し調べて見るから」

そう言つてレカを見つめるグリスさん、本当にいい人だ。

「ありがとうございます。大樹の枝亭に泊まっていますので、何か分かったら教えてください。お願いします」

「ああ、期待しないで待つてくれ。嬢ちゃんも、怖がらせて悪かったな」

僕が頭を下げると、手を上げて答えてくれたグリスさんは、レカのことにも気にしてくれているようだ。

「いえ、そんな！こっちこそ、いろいろごめんなさい！」

「はっはっは。何のことかわからんな」

「あ・・・、ありがとうございます！」

「まだ、何もしてないけどな。頑張ってみるさ」

本当に、町に入るときグリスさんに出会えてよかったと思う。

再度、二人でグリスさんにお礼を言つて町に入る。

しかし、身分証か。

レ力は、ハロース生まれだもんなあ、僕が町を出る前にどうにかしないとな。

まあ、まだまだ、教える事が山ほどあるし、僕自身稼がなきゃいけないし、祭りもあるから、先の話ではあるけど。

「し、師匠！身分証だけど、師匠と一緒になら私の必要ないんでしょ？わ、私、師匠と一緒に旅しても、い、いいよ？」

「うーん。下手したら戦争地帯を通るかもしれないから、危ないよ。それにどっちにしろ、身分証はどうにかしないとイケないしね。ちやんとするから、気を使わないでいいよ、安心して」

どこか無理してるようなレ力を安心させようと笑って言う。

「べ、別に気をつかってるわけじゃ」

レ力が小声でぼそぼそしゃべってるのだが、よく聞こえない。

「ん？何？聞こえなかった」

「なんでもないよ！！」

「な、何をむくれてるんだよー。ほら、飴ちゃんあげるから機嫌直せ」

「むー！」

「にゃ〜」

猫さん、なんだい！その呆れたような鳴き声！

結局、身分証の話はうやむやに、ギルドへ向かうのだった。

## 第十五話「初報酬を受け取った日」

ギルドに入って、早速手続きをして報酬を貰いに行く。

Gランクの報酬は難易度にもよるが、だいたい銀貨1枚が相場だ。

僕が受けた依頼は、Gランクの中でも比較的報酬がよく、銀貨2枚が報酬としてもらえる。

カウンターへ行き、魔力印を押してもらった依頼書とギルドカードを出す。

「依頼が終わったので、確認をお願いします」

「はい、わかりまし・・・た・・・？」

この依頼を受けたときと同じ職員さんのカウンターにいったのだが、目が合うとなぜか職員さんの動きが止まる。

「こちら、お昼にお受けいたしました、ゴブリン討伐の依頼でよろしいですね？」

おお、さすがプロフェッショナル、覚えていたのか。

「はい、そうです」

「わ、わかりました。確認してまいりますので、少々お待ちください」

なぜか、驚いたようにして職員さんは早足で奥へ向かう。

少しすると、職員さんが慌しく戻ってくる。

「魔力印の確認がとれました。初依頼達成おめでとうございます」

祝われつつ、ギルドカードと報酬を貰う。

「ありがとうございます」

「ここだけの話なのですが、あの依頼は討伐魔物の難易度はGなんです、魔物の数が多く、居場所も分からないので、冒険者として経験の無いGランクの方では、時間がかかる部類の依頼なんですよ」

「そうなんですか？」

「そうですよ。あの難易度の依頼をいくつか受ければ、ギルド長の認定をもらってのランクアップも可能になると思いますので、ぜひ頑張ってください」

「はい、分かりました、頑張ります」

確かに僕も猫さんがいなかったら、山をひたすら歩いて探すはめになっただしなあ、そう考えるとかなり早く終わったのか。

まさに、猫さんさまさまだ！



しかし今は、ランクアップよりレカに薬を教えるのと、身分証をどうにかしないとイケないしなあ。

Bまで一息にランクアップできれば、ランクアップ狙うのもありだけど。

あとは、お金も貯めないといけないしなあ、出費が多いし。

そういえば、溜め込んだ魔力石があつたな、全部換金しちゃおう。

魔力石がまとめて入れてある袋をカウンターに出してっと。結構溜まってるなー。

「すみません、魔力石の換金もお願いしていいですか」

「はい、大丈夫ですよ。こちらの袋の石、全てでよろしいですか？」

「全部でお願いします」

「それでは鑑定しますので、少々お待ちください」

カウンターに魔力石が並べられ、職員さんが一個ずつ見ていく。

「ふう、結構な数がありますね。全てで、銀貨5枚になります、よろしいですか？」

おお！すごいお金になった。さすがに結構溜め込んでたからなあ。

「それをお願いします」

「それでは、こちらお代になります」

お金の重みを手に感じ、少し嬉しくなる。今日はこれで猫さんにいいもの食べてもらわないと！

「ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます」

綺麗にお辞儀する職員さんに背を向けて、レカのほうへ行く。

レカはものめずらしそうに掲示板を見ている。

「何かいい依頼でもあった？」

「あ、師匠。もう終わったの？」

後ろから声を掛けると、ぱっとこちらに振り向くレカ。

「ああ。なんかほめられたよ」

「おおー、さすが師匠！」

なんか、むず痒いな。ほぼ猫さんの手柄だしなー。

「ところで何見てたんだ？」

「ああ！こっちのボードなんだけど、結構薬関係の仕事があるなー

「思つて」

「うーん、軽い怪我だと、薬師に頼ったほうが教会に行くより安く済むからね。病気はまた別だけど」

教会は、お祈りによる癒しを得意としてる人が大抵ひとつの教会に一人はいる。

もちろん、寄付という形でお金を払わないと、治療してもらえないのだけど、大抵の怪我は治せるから、重症の人やお金が有り余ってる人なんかは教会に行く。

病気は、祈りによる癒しでも一瞬で完治することはなく、薬と同程度の効果しかない、というのが一般的だ。ただ、薬は人が判断して薬を出す、祈りのほうはどんな病気でもすることは一緒なので万能である。

「これだけ依頼あると、薬師って儲かりそうだなあ」

「儲かるかは分からないけど、そこまでの依頼をこなせるようになるまで、長い間勉強しないといけないしね」

「そうなんだ、やっぱ難しい？」

首をかしげこちらを見てくるレカ。

「うーん、レカに教えるのは最低限の知識と、傷薬と風邪薬の作り方の予定なんだけど、それでも普通なら1ヶ月くらいかかるんじゃないかな。他にも、症状を自分で診て、その人に合った薬を自分で

判断して処方するってなると、僕は10年かったよ。レカは器用で覚えもいいけど、やっぱり年単位でかかるね」

「そっかあ、やっぱりそんなにかかるんだ」

「それに、ここの依頼の大半は、町で商売してる薬師からで、薬草を採ってきてくれっていう依頼だね」

「むー、現実には厳しいね」

「そうだねえ。レカが本当の意味での薬師になりたいって言うなら、僕の婆様を紹介してもいいよ？」

婆様なら喜んで教えてくれるだろう。

「うーん。今はやめとく。そこまで深く考えられないし、師匠に教えてもらうの楽しいしね！」

「了解、もしその気になったら相談するんだよ」

「はい」

つと、そういえばレカに分け前を渡すの忘れてた。

「ところで、レカさんや、これが今回の報酬だよ」

「え？私に？報酬？」

レカは不思議そうに聞き返してくる。

「うん」

「わ、私何もしないよ!？」

びっくりして僕の手を押し返すレカ。

「いやいや、ちゃんとゴブリン退治についてきたじゃないか」

「いや、本当に後ろについてただけだし!」

僕が差し出す報酬の入った手を必死に首を振って拒否しようとする。

「今度から、ちゃんと働いてもらうから、これは受け取って」

「け、けど・・・」

「受け取らないと、今日とか明日のご飯代あるの?」

渋るレカに奥の手を出す。

「う・・・うー。貰います・・・」

さすがにここまで言うと、レカも受け取ってくれた。

「はい。今日は一日お疲れさま」

「ちょ、ちょっと師匠、銀貨1枚も?!」

「うん、魔力石のほうは僕が貰っちゃったけどいいかな？」

「それはもちろんいいけど・・・って違う！さすがに銀貨1枚は貰いすぎだよ！」

「依頼料を折半だから、気にしないの」

「け、けど！そくだ！これから師匠に借りてるお金のいくら返すよ！」

「そういうのは、ちゃんとお金が溜まってからにしないさ」

「うー！」

「はいはい、うーうー言っでないで、今日はもう宿にかえりますよ、お嬢さん」

「うー・・・」

唸るレカを連れて宿に戻ったのだった。

## 第十六話「無理難題の日」

レカを引き摺り宿に戻り、ご飯を食べて部屋に戻り、今日取ってきた薬草で、傷薬の作り方を教える。

稼ぐのが目的なので、なるべく高品質で、ハロース周辺で手に入る薬草で手間を掛けずに作れる物を教えている。

薬草の匂いが部屋に充満する中、一息ついたレカが話しかけてくる。

「よかったね、師匠」

「んー？」

猫さんに背を預け、うつらうつらしてたので、間延びした声が出てしまった。

「あはは。猫さんの事だよー。今日は部屋で寝れてよかったね」

「あー、たしかに」

「っていうか、まだ猫さんに連れてこられて、1日たっていないんだよね・・・なんか今日で人生変わったなあ」

レカはしみじみと思いだすように言う。

「僕も、町に来て2日でこんないろいろあるとは思わなかった」

「師匠はそういえば、なんで旅してるの？急いではないみたいだけど」

さてどうするか。

本当のこと言うと、頭おかしい人と思われないうか。

けど、嘘つくのもなあ。

「実は猫さんは、珍しい種でね、他の大陸から連れてこられたんだ。んで、いろいろあつて、僕の手元に來たんで、もといた場所に返すためにつて名目で、各地を回ろうと思つて旅してるんだよ。僕も男だからね、冒険というものに、一回出てみたかったんだ」

大分事実を覆い隠したけど、嘘はついてないな、うん。

「へー。猫さんつてよその大陸の魔物なんだ」

「にゃーん」

「ほほー。それで師匠は、猫さんと旅してるんだー」

話してる途中で、レカが寄ってきて猫さんに背を預け、今にも寝そ



うになっている。

たしかに、猫さんの体は魔性だからな！つつい寄ってしまったて、癒されて眠くなってしまうのも仕方ない。

「ほら、今日はもう寝よう」

「むー」

「あー、はいはい」

レカが両腕を伸ばしてきたので、抱っこしてベットに移して、僕もベットに入る。

妹でもいたらこんな感じか。

「へへへ。お父さんがいたら、師匠みたいな感じなのかなー」

「せめてお兄さんでお願いします・・・」

「あはは。おやすみ、お兄ちゃん」

「はい、おやすみなさい。猫さんもおやすみ」

「おやすみー」

「にゃーん」

それから一週間ほど、依頼受けたり、薬草摘みにいたりして過ごした。

レカは相当器用で、すでに簡単な傷薬なら作れるようになった。

売りに出しても問題なさそうなので、収穫祭も近くなり、ハロースの市も賑わってきたので、出してみようということで、今日は宿で薬を作ってる。

猫さんも今日は宿で、レカが根を詰めすぎないように監視してもらっている。

僕はというと、ハロースの中央に居を構える大商人の家に向かっている。

商家の子供が病を患って、ハロースどころか王都の薬師にまで頼ってらしいのだが、回復の兆しが無く、教会の神父も診たらしいのだが、結局ダメだったらしい。

なんで、そんなところにしゃしゃり出ようとしてるかと言うと！！

薬草を取りに行った帰りに、grisさんに頼まれたのだ・・・

その商家がgrisさんの実家で、子供というのはgrisさんの兄の

お子さんらしい。

レカの件で動いてもらってるし、真剣に頼まれたので、とりあえず診るだけ診てみますと言うのが精一杯だった。

かつこよく、治して見せますとか言えたらよかったけど、神父の祈りがダメなら、僕の祝福もダメじゃないっていうことに思い当たって・・・

・  
薬師としても、王都の人たちより僕のほうが腕がいいわけもなく・・・

ああああ！いかんいかん、いろいろ悪い方向に思考が。

猫さん連れてくればよかったかなあ、ああけど家に入れてもらえないか。

そうこう考えている間に、とうとうグリスさんの実家の前までやってきた。

そしてその家の大きさに唖然とする。

すごく・・・大きいです。

これは、人一人の身分証をどうにかしてみようって言える人の実家

の大きさだ！！

くだらない事を考えていると、門番さんがいぶかしむようにこっちに来たので、事情を説明して入れてもらう。

家のほうに行くと、 그리스さんに似た歳のいった男の人に出迎えられた。

「君がキャス君だね。 그리스から話は聞いているよ。なんでも旅の薬師だそうだね。私は、 그리스の父、 ロハンだ」

「よ、 よろしくお願いします」

圧倒的存在感！

観察してるような視線がびしびしくるぜ・・・！

「ははは、 お願いするのはこちらのほうだ。 来て早速ですまないが、 孫の様子を見ていただいてよろしいだろうか」

「わ、 分かりました」

こうして、無理難題へと向かうのだった・・・

## 第十七話「薬師のお仕事の日」

グリスさんの実家の2階、一番奥の部屋に入ると、そこには大きなベットに、ちょこん、と女の子が寝ていた。

「この子が孫のアリアだ。症状のほうは、最初は胸の痛みを訴えたので、王都の薬師、教会の神父にも診せたのだがな。王都の薬師は、こんな症状は見たことがないと言いおるし、町の神父は、金、金言う割には、祈りがまったく効果がでない！うちがもう少し教会に縁があればよかったのが……。最近では、痛みだけでなく、段々体が弱ってきて、立つことも難しい」

うーむ、僕もこんな症状みたことないなあ。

「他の薬師さん方に、何か薬を出されましたか？」

「ああ、痛み止めの薬だけだが。えーっと、これだな」

渡された薬を嗅ぐが、痛み止めとは関係ない薬草が入ってるなあ。

「失礼ですが、これは王都の薬師が？」

「ああ、そうだ。町の薬師は自分では判断できないと逃げてしまっ  
てな」

なんという・・・。

まあ、良く分からない症状の大商人の子供を診て、薬出して万が一死んだなんてことになったら、町では暮らしにくそうだなあ。

とりあえずこの薬はやめてもらうか。

「そうですか。この王都の薬師の薬は、痛み止めとして効果がありましたか？」

「いや、まったくないな・・・。」

うーん、王都の薬師もピンきりなのかね。

「とりあえず、この薬はやめましょう。痛み止めとは関係ない薬草が入っています」

「な、なんだと！？そんなこと、嗅いだけで分かるのか！？」

「分かりますよ、薬師ですからね。こんなので痛みが止まれば、そこらへんの雑草を煮て食っても痛みは止まります」

「ば、馬鹿な！王都でも腕利きの薬師と聞いて、頼んだのだぞ！？」  
こちらに食って掛かってくる口ハンさん。

まあ、さすがに息子の紹介とはいえ、どのだれとも知れない小僧の言うことよりは王都の薬師を信じたいんだろうなあ。しかしこれはひどすぎる。

「腕利きかどうかわかりませんが、これは薬とは呼びません。薬草を適当に混ぜただけのものです。僕の手持ちをお渡ししますので、こちらを飲んで頂ければ、そのよく分からないものが、薬じゃないということが分かりますよ」

「だ、だが・・・」

「僕は、田舎の薬師ですが、雑なものを人様に飲ますようなことはしません。ちょうどお昼が近いですし、お嬢様に一回起きてもらって、少し食事を食べてもらってから、薬を飲んでもらいましょう。それから少しすれば、分かります」

ちよつと、大口を叩いてしまったが、それくらい言わないいけないことだ。

「う、うむ。分かったが、最近アリアは食事もあり受け付けなくな。薬は飲ませていたのだが・・・」

「え・・・ほとんど何も食べずに、このへんなものを与えていたんですか・・・？」

「あ、ああ」

これは、胸の痛みと体が急激に弱ってきたのは、関係ないのかもしれないな。

「失礼ですが、こんなものばかり口にしていれば、さすがに体も弱りますよ……?」

「なに!? 本当か!？」

「そりゃ、よくわからない配合してありますからね。薬だって自分の症状に合ったものを、適切に飲まないと、最悪死ぬことだってあるのに。食事が減れば、それだけ栄養が体に回らないのに、その弱った体にこんなものを与えれば、毒を盛っているようなものですよ」

「わ、私は、私は……!」

む、この変なものを作った王都の薬師が許せなくて、つい熱くなってしまった。

ロハンさんが、すごい落ち込んでる!

「すみません、まるでそれを飲ませてる人が悪いみたいな言い方をして。そんな下手なものを薬と言って渡した王都の薬師が許せなくて、熱くなってしまう。誰が悪いかって言えば、そんなものを作って渡した自称薬師なんですから」

「そうだな……」

少し立ち直ってくれたロハンさん。

「はい、そうです。すみませんでした」



「いや、いい。私たちも悪くないわけじゃないからな。そんなことより、食事だったか？」

「あ、はい。よければ厨房借りたいのですが」

「それはいいが。なんでだ？」

「あまり食事を食べていないなら、病人に優しい食を、と思いきして」

「分かった。案内させよう。よろしく頼む」

婆様と二人だったから、実は料理は少し自信がある。

というわけで、婆様直伝のスープを作る。

いろいろ薬を入れてあるのだが、全部が調和しておいしい味になるという、婆様マジック！

ちなみに薬は、体が弱ったときに飲むものを数種類。

これ飲むと、暖かくなってぐっすり眠れるんだよなあ、風邪引くと婆様が作ってくれたつけ。

懐かしんでいると、いい匂いが立ちこめてきたので、皿に盛ってお嬢様の部屋に戻る。

お、お嬢様が起きて、ロハンさんと話してるな。

「失礼します、お食事を持ってきました」

そう言つて、備え付けのテーブルに置く。

「おお、ありがとう。アリア、こちら旅の薬師でキヤス君だ、グリスの紹介でな、腕は確かだから安心しなさい」

「まあ！叔父さまの！アリアと申します、よろしくお願いします」

グリスさんの名前を聞いてうれしそうにするお嬢様。さすがグリスさん、人気があるな。

「キヤスです。こちらこそよろしくお願いします」

挨拶も済ませたので、早速スープを飲んでもらおう。

「早速ですが、体にいいもので作ったスープを作ったので、食べてから薬を飲んでもらいます」

「あの、私、食欲がありません・・・」

「一口でも食べてみてください。自分で言うのも何ですが、おいしいですよ」

「分かりました、それでは頂きますね」

軽くお祈りをしてから、お嬢様はスープをすくって、上品に口に含む。

「お、おいしい。とてもおいしいです、このスープ！」

「それは良かったです。あまり急いで食べないで下さいね。お代わりもありますから」

「まあ、うれしいわ」

「ふむ、それでは私たちも食事をしようか」

一旦この場を、部屋の前で待機している侍女さんに任せて、食堂に移動して昼食をいただく。

「今日は、調子がいいみたいだ。それでも、起きたときは胸を押さえていたから、痛いみたいだが・・・」

「原因はこれからとして、とりあえず痛み止めを飲んでもらって、体力を付けましょう」

「そうだな、分かった。それにしても君は優秀なんだな」

結構信頼してもらえたようだなによりだ。

「いえ、そんなことは・・・。師匠に比べればまだまだです」

「ふむ。最近は、聖女の影響か、教会で癒しを行使できるものが増えたらしくな。薬師の質は、王都でも落ちてるようだ・・・、いや王都だからか。あそこは裕福な者が多いからな。寄付も多くできるのだろう」

「聖女、ですか？」

聞き慣れない単語が出たので聞いてみる。

「ああ、なんでも癒しの神の代行者だそうだ。各地を回って施しをしていると聞く」

「それはまた、すごい方なんですねぇ」

癒しの神はいろいろしてるんだな、祝福もらっただけであった事無いけど。

「そうだな。しかし、噂では、教皇は聖女を近くに置いておきたい

が、聖女が勝手に飛び回っているという話もあるな」

「噂が本当なら、とんだお転婆娘ですね」

「はっはっは、確かにな。収穫祭が近いせいか、人と共にいろいろ噂が入ってくるのだな。他にも、王子が実は双子だったとか・・・王都ではお転婆な姫さまが暴れてるだとか・・・学術国ではまた新しい魔法具が運び込まれたとか・・・帝国と同盟がまた戦争を始めるとか・・・隣の大陸で神獣の子が生まれたとか、その子が攫われたとか・・・」

さすが、元大商人。いろいろ知ってるなあ。噂話もこれだけあると、本当なのもありそうだな。

覚えがある噂も混じってるし・・・

目立たないようにしよう！！

話をしていたら、昼食もとり終わったので、お嬢様の部屋に戻る。

スープも食べ終わっていたので、さっそく薬を飲んでもらう。

「この薬を飲んでください。飲むと眠くなりますので、寝て起きた

ら、痛みも大分引いてると思います」

そういつて、お嬢様に薬を渡す。

「いつものとは違うんですね」

そういつてお嬢様が薬を飲む。

「だんだん眠くなってくるので、そのまま寝てください」

「分かりました」

「さて、お嬢様も寝たようなので、今日はかえりますね」

少ししたら、すぐ寝息が聞こえてきたので、ロハンさんに向けて言う。

「もし何かあったら、大樹の枝亭に泊まっていますので、連絡を下さい。すぐに向かいます」

「うむ。なんなら泊まっていてもいいぞ、息子夫婦もそのうち帰ってくる」

「あー、宿に人を待たせてるので。また明日、午前にきますね」

「そうか、分かった。明日の午前だな。待っているぞ」

「はい、それではまた」

そうして、グリスさんの家を後にした。

## 第十八話「お金を貸した日」

な、なんとか乗り切った・・・！

しかし、あんな薬を売りつけるなんて酷い話だ。

おかげでいらいらするな。

宿戻ったら猫さんに癒されよう。

あとは、痛み止めをある程度つくるかぁ。

っていうか、帰り際に貰ったお礼の袋がなんかすごいジャラジャラ言ってる。

なにこれこわい。

もしものときのために、とっておこう・・・

「ただいま！猫さん！レカ！」

「にゃーんっ！」



扉を開けた瞬間猫さんが飛び掛ってくる！

もちろん、避けるなんてことはせずに、そのまま抱きついて、ベツトヘダイブ！

「おかえりー、師匠」

「ただいまー」

猫さんと抱き合いつつレカを見ると呆れ顔だ。

「本当に、猫さんと師匠は相思相愛だよ。師匠が出て行ってちよつとすると、猫さんがうろろしだして、薬作りになかなか集中できなかつたんだよ！」

「そりゃ、すまん」

「にゃー・・・」

すまなそうに鳴く猫さんもまた愛らしい。

「可愛かったからいいけど。師匠が帰るちよつとまえに、猫さんがベツトの上で獲物を狙う体勢に入ったときは、ちよつと怖かった・・・」

「またまた、すまんね。猫さんも、レカにあんまり迷惑かけちゃだめよ」

「にゃん！」

猫さんが、レカに寄っていつて体を擦りつける。

そんな猫さんを、レカは穏やかな顔で撫でている。

「仕方ないなー。ところで師匠、 그리스さんの家はどうだったの？」

「うーん、なんとかなりそうでならなそうで。まあ少し改善できたんだけど、そもそも原因が分からないからなあ、どうにもならなきや、神様にでも祈って見ることにするよ。レカのほうは、薬草は足りてる？市に出すなら、前日に教えてね。僕も市は初めてだから、見ておきたいし」

「はい。けど実際どのくらい作ればいいのかな？」

指折り考えるレカに和みつつ疑問に答える。

「うーん、市を見た感じだと、そこそこ売れてたからね。薬草取りにいつて作って、次の日売って、って考えると、最低でも半日で20は作れるようにならないときついね」

「20かあ、まだまだだあ」

「商売は何でもそうだけど、信用が第一だからね。いい物を平均的に作らないといけないよ。あとは、定期的に売れるようにしないとイケないね。最初はそこまで売れなくても、使った人がいい物だと

判断してくれば、ちゃんと売れるようになると思うし、定期的に出してれば他所にお客さんが流れちゃうことも抑えられるしね」

「分かったよ、師匠。けど、師匠は市で物売ったことないのに、よくそういうこと知ってるよね？」

「村に来る行商人のおっちゃん、商売について話してたから、ほとんど受け売り。地方の村を周って歩いてる人だから、苦労が多いみたいでいろいろ教えてくれたんだよ」

「なるほど。それじゃ、いい物を作るために、夕飯まで師匠と猫さんはお散歩でも行ってきたよ。猫さんも部屋の中ばかりじゃ息が詰まるだろうし」

「うーん、レカが根詰めないか心配なんだけど」

「師匠と猫さんが近くでラブラブしてたら、私の精神が持たないんだけどな！」

笑顔で言うレカ、その笑顔に得も知れぬ寒気を感じる。

「あー、はい、分かりました」

「素直でよろしい。猫さんもデート楽しんでおいでー」

「にゃにゃーん！」

と言うわけで、弟子に部屋を追い出されて猫さんとデート。

おいしい匂いに誘われて、屋台が立ち並ぶ通りに出る。

串焼きを買って、猫さんに与えつつ自分も食べて歩いていると、人にぶつかってしまった。

「おっと、すみません」

「あ、いえ、私の方こそ、不注意ですみません」

うお！獣人さんか。

やさしそうな人で助かった。

獣人には気性の荒い人も多いらしいからなあ。

顔は美形、短い髪とあいまって、中性的で女性に好かれそうな女人だ。

尻尾と耳が猫っぽい、実にいいね！

「にゃーん!？」

「はい、ごめんなさい。耳が・・・猫耳が僕を狂わせたんだ・・・、けど猫さんの耳一筋だよ？浮気してないよ？」

「にゃー?」

「本当、本当!今日は僕のベットで一緒に寝よう!」

「にゃーん」

嫉妬する猫さんも可愛いよ!猫さん!僕は!僕はもう!

「あ、あのっ!」

あ、やばい、獣人のお姉さんを無視して猫さんといちゃついていた。った。

「は、はい!すみません!」

「あ、いえ、そんな。こちらこそすみません。そ、それですね、ちよっとお尋ねしたいことがあるんですが・・・」

申し訳なさそうに、お姉さんが問いかけてくる。

「はい、私に答えられることなら何なりと」

「えーっと、この辺で、お金の入った袋を見ませんでしたか？」

藁にも縊りそうな勢いで聞いてくる。

「見て無いです。無くしたのですか？」

「そうなんですよー！気づいたら無くなってて！」

すられたのか、落としたとしても、もう拾われてとつくに無いだろう。

っていうか、獣人のお姉さんがやたらフレンドリー、そして親近感が沸いてくる。

「それは、たぶんもう見つからないかと・・・」

「やっぱりですか・・・」

しょぼんと、耳が垂れる獣人のお姉さん。

「あー、お金以外に何か入ってたんですか？」

「いえ・・・お金もほとんど入って無かったのですが」

更に、しつぽがぺたんとなる獣人のお姉さん。

「あ、あの、無理を承知でお願いしたいのですが！お金をいくらかお貸し頂けないでしょうか！？」

いきなり大声でお金の貸してくれと言ってくる獣人のお姉さん。

さっきから注目を浴びていたけど、更に視線が集まってきたる！

「と、とりあえず向こうで話しましょう！」

獣人のお姉さんの手を取って人のいない方へ。

人のいない路地で話を聞くことに。

「すみません、注目を集めてしまって」

全体的にしゅんとなる獣人のお姉さん。

「いえ、気にしてませんので。それで、いきなりどうしたんですか？」

「あ、あのですね。実は路銀が底をついてきまして。本当ならギルドのほうで依頼を受けるんですが、ちょっと問題があって動けない状況でして……。その問題も明日には片付きますので、そしたら依頼を受けてお金かえますので、よろしければ、お嬢様の食事代だけでもいいのでお借りできないかと」

「あー。事情は聞きますが、食事代だけでいいんですか？寝ると

「ころとか」

「宿は、町にきたときに収穫祭までいるつもりで、前払いで済ませたのですが、まさかここまで問題が長引くと思わなくて・・・」

問題が長引いたせいで、ギルドの依頼も受けなくて、とどめにお財布を無くして、ご飯にも困ってしまったのか。

「それじゃあ、食事代だけでいいんですね」

「は、はい。貸していただけののですか!？」

「いいですよ。ちょうど臨時収入もあったので」

そう言って、銀貨を1枚渡す。

これなら、相当大飯食らいじゃない限り2人で3日は食べれるよな。

「こ、こんなにお借りしていいのですか?」

「構いませんよ、困ってるときはお互いさまです」

村では、一人が困ったときにみんなで助けないと、自分が困ったときに助けがこないからなあ。

まあ限度はあるが、悪い人でもなさそうだし。

「ありがとうございます!絶対にお返しいたしますので!どこにお



住まいかお聞きしてもよろしいですか？」

「あー、宿街の大樹の枝亭に、収穫祭終わるまでは居ますので。無理はしないでいいですよ？」

「いえ、お借りした物を返さないのは、どの神の教えにも反しますので」

「分かりました、それでは待ってますので」

「はい！それでは、失礼致します。ありがとうございました！」

礼を言つて、獣人のお姉さんは走って帰っていく。

いい尻尾と耳だったが、そろっかしい雰囲気をもし出す獣人のお姉さんだったなあ。

さて、僕たちはもう少し屋台を堪能しようかね。

「にゃん」

猫さんを引き連れて、来た道を引き返すのだった。

## 第十九話「旅の仲間ができた日」

その後、露店を冷やかしたりして宿に戻り、やっぱり根を詰めて薬を作っていたレカを引っ張って晩御飯を食べさせる。

「そんな、根詰めなくても、特にいつ出すとか決めてないし」

「けど、なるべく早くいろいろできるようになって、師匠に恩返ししたいし」

なんていい弟子を持ったんだ、僕はうれしいよ！

「まあ、無理だけはしないように。体壊しでもしたら元も子もないしね」

「はい。けど、収穫祭もあるからな！。その前に、ちゃんと市に並べられるだけの量と質の薬を作れるようになりたい！」

「そうだねえ。さっきちょっと見たけど、どれも平均的に調合できてるし、作るのも少し早くなっただし。もう少し早くれるようになれば、定期的に市に出せるようになるんじゃないかな。傷薬は、一年通して売れるしね」

「うーん、頑張ろう！目指せ市場独占！」

「独占するな！まあけどそんなことより、定期的にレカ一人で薬草を取りに行けるように、身分証をどうにかしないといけないしなあ」

そういえば、ロハンさんに頼めばいけるかもしれない。

・・・！

ああそれでか、グリスさんの頼みは。

無理難題だけど、解決できればレカのこと頼めるしなあ。

ハッ！ついでにレカの薬をロハンさんの店で売ってもらえるようにすれば！

冴えてる、冴えてるぜ僕！

「・・・匠？師匠！」

レカが肩をゆすってくる。

「！？どうしたのレカ」

「どうしたのって・・・さっきからずっと師匠のこと呼んでんだよ！」

「む、すまんすまん。レカの今後でいい案が思い浮かんでな！」

「え、あ、そうなんだ」

なんかレカの反応が微妙だ。

「なんだー？疑ってるのか、本当に妙案なんだよ！僕がいなくなってもレカがちゃんとやっていけるっていう！」

「し、師匠！その事なんだけど！」

意を決したようにこちらを真剣に見てくるレカ。

「は、はい！？」

釣られて僕も背筋を伸ばしてレカの話を聞く。

「え、えっとね、私、師匠の旅に同行しちゃダメかな？」

「それは別に構わないというか、嬉しいけど、猫さん帰すために、隣の大陸行くことだけは決定してるんだよ？危ないよ？」

「うん。分かってる。けど師匠のお婆様じゃなくて、師匠にもっといろいろ教わりたい！」

すごい真剣な目でレカが僕を見る。

ここまで言われたら、断る理由もないし、実際旅の仲間ができて嬉しいというのが本音だ。

「よし！レカ、一緒に行こう！」

「え、いいの！？やった！」

嬉しそうにはしゃぐレカを見ると、こっちまで嬉しくなる。

「よろしくね、レカ」

「にゃん！」

「こちらこそ、よろしく願いします、師匠！猫さん！」

そして、夕飯も食べ終わり部屋に戻る。

レカが傷薬を作っている横で、僕も痛み止めを作る。

「グリスさんの依頼と収穫祭が終わるまでは、ハロースにいるから、その間にレカの身分証はどうにかしよう。最悪無くてもいいけど、あつたほうがいいからね」

「はい、お願いします！」

レカが元気に返事を返してくる。

「あとは、レカの旅支度もしないとね」

「そっちは、自分でお金稼いで準備したいな、何でも師匠頼りは嫌だし」

レカは申し訳なさそうに希望を言うてくる。

そんなこと気にしなくていいのにな。

「頼られてもいいんだけどね！」

「あはは。けど自分でどうにかしてみたいから、ダメだったらお願いする」

「そうだね、まだ時間あるし。せっかくだから、レカの作った薬を市に出したいしね」

「うん。頑張る！」

両の手でこぶしを作りやる気満々のレカ。

「僕もグリスさんの依頼頑張らないとなあ。けど原因が分からないしな……。そもそも神父が祈りを奉げてダメなんて」

「教会の似非神父？」

「似非神父？ハロースの教会の神父に頼んだけど治らなかったらしい」

「へー。けどあの神父いい噂聞かないよ、手抜いたとかじゃない？」

「いやいや、町の大商人の娘だし、手は抜かないでしょ」

「そうだね、あの似非神父お金にうるさいらしいし」

「お金のうるさい神父って……」

さすがに呆れてしまう。

「噂だと、裏で町のチンピラとつるんできるとか言われてるよ。あんまり係わり合いになりたくないタイプだね」

「それは嫌な神父だなあ」

ふーむ、明日自分でも一度祈ってみるか。

僕もあんまり信仰心ないけど。

痛み止めも順調に数が出来たので、薬箱に入れてしまう。

レカも一区切りついて、猫さんを撫で回している。

「今日はそろそろ寝ようか」

「はい」

「にゃーん」

猫さんが、スタッと僕のベッドに上がってくる。

そつえば、一緒に寝るって約束したな。

「あれ。猫さん、師匠と一緒に寝るの？」

「昼間は約束したんだよ」

「にゃーん」

「ずるい、私も一緒に寝るー！」

そう言つて、レカがこっちのベッドに飛び乗ってくる。

「ちょっと！おちるおちる！」

「にゃっ、にゃあー」

「わ、わっ。師匠押さないで！」

結局、なんとか各々定位置を探し出す。

「レカ、あぶないでしょ！」



「ごめんさい・・・けど、私だけ仲間はずれは嫌！」

「仲間はずれって・・・」

「うー」

唸ってるレカを見ると、これ以上怒るのも気が引けてくる。

娘がいてこんな感じなのかな・・・

クエスさんの気持ちが分かった気がする。

「仕方ない。狭いけどみんなで寝るか。落ちるなよ、落とすなよ」

「やったー！」

「にゃん！」

こうして、2人と1匹で眠りについた。

## 第二十話「力が強化された日」

奇跡的に一人の脱落者も出さずに朝を向かえ、朝食をとってロハンさんの家に向かう。

すぐに、ロハンさんとアリアの両親に迎えられ客室へ。

アリアの両親はとても丁寧にお礼を言って、仕事に出かけて行った。

「すまん。本当なら息子夫婦もちゃんと紹介したかったのだが。収穫祭前は仕事も休めないから勘弁してやってくれ」

「いえいえ。仕方ないですよ。それより、お嬢様の様子はどうか？」

「アリアはあれから今朝まで寝てた。久しぶりにぐっすり眠れたらしい。痛みも無くて、しっかり朝食も食べていた」

「よかった。実は、昨日あれだけ大口叩いた手前、痛みが引いて無かったらどうしようかと・・・」

本当に良かった。

あとは原因がわかればいいんだけどなあ。

「ありがとう。君はあの子の恩人だ」

「いえ、まだ治ったわけじゃないので」

治せるかも分からないのに、恩人なんて言われると焦る。

「いやいや！あの子があのままだったらと思うと、本当に感謝してもしきれない」

あの状態よりかはましかあ。

けど、本当に治す目処が立たないな。

そもそも、祈りはほぼ万能だから、それが効かないっていうのがな。

まあ、祈った神父があれみたいだし、一応僕も祈ってみるか。

「とりあえず、様子を見たいのでお嬢様の部屋に行きましょう」

そう言って、お嬢様の部屋へ移動する。

「おはようございます、お嬢様」

ベットの上で起き上がって、本を読んでいるお嬢様に声を掛ける。

「まあ！先生来てくださったのですね。おはようございます」

先生・・・！

師匠と並んでいい響きだ・・・

「お加減はいかがですか？」

「ここ最近で一番調子がいいです。これも先生のお陰です。ありがとうございます」

上品に微笑んで感謝を言葉にするお嬢様。

あの無骨なグリスさんと姪には見えないな！

「朝ご飯もちゃんと食べれたようですね」

「はい！けど、先生のスープのほうがおいしかったです」

「あはは、気に入ってくれて良かった。また、お昼に少し多めに作

つておくよ」

「嬉しいです！ありがとうございます」

ロハンさんは椅子に座ってニコニコしている。

孫娘が元気に話しているのがとても嬉しそうだ。

「さて、痛み止めのほうはしっかり効いてるみたいだね」

「はい。前に飲んでいたのとは全然違うですね」

「あー、はい。あれとは物が違いますので」

「そうなのですか。先生はすごい先生なんですネー！」

目をきらきらさせてお嬢様がこちらを見てくるから困る。

「僕なんて師匠に比べればまだまだなので」

婆様は本当に凄腕だからなあ。

薬作るのも早いし、処方も的確だし。

「恥ずかしながら、お嬢様の病氣自体を治す目処が立っていませんので、少し質問してもいいですか？」

「もちろんです、なんでも聞いてください！」

お嬢様がベットから身を乗り出して答えてくる。

「そ、そんな意気込まないで大丈夫ですから」

「あ、失礼しました」

しょぼんとして、ベットに背を預けなおすお嬢様を見て少し罪悪感が！

気を取り直して質問タイム。

「胸が痛くなる前に、何か変わったこととか、ありませんでしたか？」

「えっと、痛くなる直前に、何かが体に入ってくるような感じがして。とても悲しい感じになって・・・」

つらそうに胸を押さえてうつむくお嬢様。

「大丈夫ですか!？」

「思い出したら、すこし痛んでしました。大丈夫です」

うーむ、やっぱり自分でも祈ってみるか。

「すこし、考えを纏めるので、待ってもらっていいですか？」

「はい、分かりました」

部屋にある椅子に腰掛けて、いかにも考えてますよって感じに腕を組んで目を瞑る。

しかし、祈るのは久しぶりだな！

あーあー、テステス。交信テスト。

神様神様、あなたのかわいい僕が、ここで苦しんでいます。ぜひ、助けていただけませんか？

・・・

「人の子よ、待っていましたよ」

あれ、天使様じゃないですか。

僕、癒しの神様に用がですね！

「分かっております。ただ、あなたはあまり信仰心がありませんので、我が主が直接お声を掛けることができます」

おーまいごつど。

「我が主のお声を聞きたいのなら、もう少し信仰心を持ってください」

あはい。

ところで、待っていたというのは？

「あなたの前で苦しんでいる人の子には、事情がありまして、それを解決するために癒しの力を持つものを待っていたのです」

そうなんですかってそれってべつに僕じゃなくてもいいんじゃないですか。

神父が前に祈ったらしいのですが。

「ある程度力のあるものでないけません。あの神の子は信仰心を失ってすでに力を行使することもできないようです。あなたの場合は、信仰心が無くとも、直接祝福を受けていて、世界でも類を見ない癒しの力があるので、苦しんでいる人の子を助けることができるでしょう」

そうなんですか。



けどそれじゃ、僕が来なかったらやばかったんじゃない！

「いえ。元々は我が主の声を聞けるものが向かっていたのですが、あなたのほうが偶然早く辿りついたのです」

なるほど。

そしたら、僕はどうすればいいですか？

「本来なら、我が主から力を一時的に授けるところですが、あなたの力なら問題なく癒せるので、強くその人の子を癒したいと祈れば大丈夫です」

それでは。

.....

どうですかね？

「問題なく力が行使され、人の子の苦痛は取り除かれました」

おお、よかった！

「あなたのお陰です。礼を言います」

いえいえ。ところで、なんであんな事になってたんですか？

「あの人の子の中に、天使の力の一部が残っていたのです」

なんだってー！

「我が主の獣が攫われたとき、天使の一人が、人の子に入ってそれを奪い返そうとしたのです。結局、その天使はそれに失敗し、その人の子に力の一部だけが残ってしまったのです」

なるほど。

それでは、もう大丈夫なんですね？

「はい。もう、力は取り除かれ、あなたに吸収されたので、大丈夫です」

そうかそうか、よかったよか・・・った・・・！？

え、吸収？！

「はい、あなたの中に、天使の力が吸収されました」  
なにそれこわい。

「守護の祝福が強化されました」

それは嬉しいです。

「それでは、我が主の獣をよろしく頼みました」

あ、はい、任せてください。

## 第二十一話「聖女様と出会った日」

「先生？」

お嬢様が心配そうにベッドの上からこちらを見てくる。

「あー、すみません、ちょっと考え事に没頭していて」

「いえ。それで何かわかりましたか？」

「む、もう少し考えを纏めさせてください」

あれ、どうしよう。

天使様と話して治しておきました。

なんて言ったら僕のために薬師が呼ばれてしまう。

これは適当に誤魔化すしか・・・

「表が騒がしいな」

考え込んでいると、ロハンさんがそう言い立ち上がって窓を開ける。

遠くに屋敷の門の前でもめている二人組みが見える。

少しの間成り行きを見守っていたロハンさんが、こちらを見てくる。

「気にせず行つて来てください。僕ももう少し考えを纏めていたいいので」

ロハンさんが対応に言つてゐる間に少しでも考えを纏めなければ。

「む、そうか。すまん、すぐ戻る」

そう言つと、ロハンさんは足早に部屋をでたので、早速どうにかできないか考える。

いろいろ考えてみたが、やっぱり自然に治つたことにするのが一番いいか。

気づいたら痛み止めが無くても大丈夫！これが人体の神秘だよ！つて押し通せばなんとかなるかな。

「すまん、キャス君、教会の人が来てね」

ロハンさんが扉を開けて歸つてきた。

ロハンさんの後ろには、修道服姿の女性と見覚えのある獣人のお姉さんが立っていた。

「あ！あなたは昨日の！」

お姉さんも気づいたらしく、こっちに見て目を見開いている。

「ほう、キャス君は聖女様の従者と知り合いか？」

あの修道服の女性が昨日言ってたお嬢様で、聖女様なのか、さすがにお金を貸したことは黙っておこう。

「ええ、といっても昨日道でぶつかってしまっただけなのですが、その節はすみませんでした」

「い、いえ。こちらこそ！そう言えば自己紹介もしてませんでした、私はアルタインと申します」

こつちの意図に気づいたのか、お姉さんは申し訳なさそうに自己紹介をしてくる。

「あらあら。アルは私より先に挨拶してしまうなんて」

すると後ろの聖女様が少し前に出てくる。

「私はリズテールと申します。アルとは面識があるようで、私とも仲良くしてくださいね」

おっとりとした女性がこちらを見て言う。

「はい、僕はキャスと申します。こちらこそよろしく申し上げます、リズテール様、アルタイン様」

「あらあら、様だなんで。リズと呼んでください」

「私も様はちよつと。アルでいいので」

「それではリズさんとアルさんで。僕もキヤスでいいので」

二人にそう告げると満足そうに頷いて返事を返してくる。

「して、聖女殿。娘は今この薬師のキヤス君に見てもらっているところなのだが、何の用がおりなのか？」

ロハンさんは神父のこともあり、あまり教会にいいイメージを持っていないようだ。言葉にとげがある。

「はい。実はつい先日、神よりお告げを賜りまして。ここのお嬢様が大いなる力が体の内に入ってしまう苦しんでいると。命の危機は無いと聞いていたのですが」

そう言つて一度お嬢様を見て続ける。

「すぐに来たかったのですが、こここの神父様の噂を聞きまして、アルに頼んで秘密裏に証拠を集めていたのです。そちらは無事終わりましたので、よろしければ私に、お嬢様のために祈りを奉げさせていただけませんか？」

おっとり穏やかな口ぶりで話すなりズさんに、ロハンさんも少し見惚れていたようだ。

「あ、ああ。聖女様にそこまで言われたら、こちらこそお願いしたいほどだしな。キヤス君、いいかな？」

「ええ、そうしてください」

そして僕は心の中で、神様に心の底から祈っていた。聖女様が治したことにしてください、と。

これが一番いいパターンな気がする。

神様が僕に味方してくれたんだきつと、さすが神様、少し信仰心というやつを身につけたいと思います！

「それでは失礼します」

そう言つて、リズさんが成り行きを見守っていたお嬢様の手を取る。

瞬間、リズさんがほんのり発光する。

つて、光つてる！？

聖女の癒しが特殊なのか、その光は段々お嬢様も包み、やがて引いていく。

お嬢様は光に包まれて、眠ってしまったようだ。

穏やかな顔で眠るお嬢様にロハンさんもほっとしている。

「これで、大いなる力は取り除かれたと思います」

神が少し言葉というか意思を濁しているようでしたが、とリズさんが続いているが無視だ！

僕は何も知らない。

「うむ、とりあえず客間に移ろうか」

ロハンさんの号令で客間へ移動。

「まずはキャス君、本当にありがとうございます。君のおかげで娘は助かった。そして聖女様、ありがとうございます。我が家を代表してお礼申し上げます」

そっくり、深く頭を下げるロハンさん。聖女様の奇跡を目の当たりにして、大分教会不信も薄れたようだ。

「僕は病氣に関してはほとんど何もやってませんので」

「私も神に導かれただけです」

「それでもお二人共に何かお礼をしたいのだがな」

少し困ったように笑いロハンさんが言う。

「私は先の神父の不始末のお詫びということで、これから町の有力者として、エツカ教を信賴して頂ければそれで十分に」

「それとは別にいくらか寄付はさせてもらいますよ」



リズさんの言葉にロハンさんは頷き、そうつけたした。

そうして二人が自然とこちらを注目してくる。

これはチャンスかな。

「その、もしよければ、僕の弟子がスラムの出身で身分証をもっていないので、なにかと不便です。持たせたいと思うのですが、ロハンさんにお力添えいただきたいと思うのですが、ダメでしょうか？」

「その話なら息子から多少聞いてたよ。勿論力添えしよう。そうだな、あとで一筆書こう。それで大丈夫なはずだ」

これで一つ問題解決だな。グリスさんとロハンさんに感謝だ。

その後、昼食を頂き、少しの間ロハンさん、リズさん、アルさん、僕で話をする。

「しかし、まさか聖女様がハロースにお出でとは」

「お告げのこともありましたし、こちらのほうは聖都と遠いこともあって、なかなか情報が入ってきませんから。自分の足で赴くのが一番です。教皇領に引き籠もっていてはカビがはえてしまいますわ」

「はっはっは、噂に違わぬお転婆のようだ!」

ロハンさんもリズさんの話を聞いて、親しみを持てたのか、気さくに笑う。

リズさんも氣を使われるより、お転婆と言われたほうが嬉しそうだ。

「キャスさんはすごいですね、その年で薬師として独り立ちしているなんて」

アルさんが尊敬の眼差しで見ってくる。くすぐったいな。

「いやいや、聖女様の騎士をやってるアルさんのほうが凄いですよ」

「そんな、私なんて!」

「あはは、僕もまだまだですよ」

こちらも和やかに会話が進む。

しかし時間が経つに連れ、レカが根をつめていないか心配になってきたのでお暇することに。

ロハンさんに書いてもらった紹介状を懷に仕舞い、レカの話をしたらかしく昼食をつめてもらったのでお土産も万端な状態で帰途につく。

ロハンさんが玄関先まで見送ってくれ、最後までお礼を言っていた。

アルさんとリズさんも一緒に出て、家の前で別れる。

「（キャスさん、気を使っていたいてありがとうございます、必ず返しにいきますので）」

「（余裕が出来たらでいいですよ）」

アルさんと小声で会話をする。

「あらあら、アルとキャスさんは仲良しさんですね。寂しいですわ」

リズさんは笑顔で言うので、あまり寂しそうではない。

「ち、ちがいますよ！？これはですね！」

「それでは私たちは教会にいますので、何かあれば頼ってくださいね」

アルさんのいいわけを無視してリズさんが続ける。

「はい、それでは」

「きゃ、キャスさんも否定してくださいよー！」

そんな叫びを背に受けて僕は宿に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0861z/>

---

猫さんといっしょ

2011年12月29日22時39分発行